上村屋敷遺跡発掘調査報告書

－浅岸地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－

2007.3.30

盛岡市・盛岡市教育委員会

上村屋敷遺跡発掘調査報告書

－浅岸地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－

2007.3.30

盛岡市・盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は平成８年度から同14年度にかけて、盛岡市浅岸地区土地区画整理事業に伴い実施した、上村屋敷遺跡の発掘調査報告書（概要報告書）である。

2．整理中の平成12年12月24日未明に発生した文化財調査室の火災により、多くの調査記録や遺物類が焼損または滅失するにいたった。特に遺跡南半部の第４次調査区については、ほとんどの遺構図面（第１原図）が焼失したため、各遺構の重複関係や、土坑や柱穴など一部の遺構番号すら不明となった。今回の報告にあたっては、残存する諸資料を用いて、可能な限り図面、写真等の復元に努めたが、掲載図中の（焼失）と標記した個所のごとく、復元不可能な個所も多かったため、ほとんどの遺構については個別の遺構図や記述を割愛せざるをえなかった。このため、各遺構については一覧表にまとめ、遺物についても残存するものを一覧表にまとめ、その中から代表的なものについて実測図及び写真を掲載し、調査成果の概要を把握できるように配慮して作成した。

3．本書の編集と執筆には、盛岡市教育委員会文化課及び盛岡市遺跡の学び館職員の協力を得ながら、遺跡の学び館　室野秀文、藤村茂克（現総務部管財課）、神原雄一郎、佐々木亮二、松川光海が担当した。

4．平面位置の標記の調査グリッドは大グリッド（50m×50m）と小グリッド（２m×２m）の２種類とした。大グリッドは公共座標（旧測地系）Ｘ系のＸ－32,000.000m、Ｙ＋30,000.000mを基点に、西から東にアルファベット、北から南へアラビア数字で標記した。また、小グリッドは各大グリッドの北西隅を起点に、西から東にアルファベットのＡ～Ｙまで、北から南にアラビア数字の１～25までで標記した。

（例）	遺跡略号	調査次数	大グリッド		小グリッド
	NWY	003	N2	－	B14

5．高さは標高値をそのまま用いた。

6．土層は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文で触れ、個々の層位については割愛している。なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

遺　構	記　号	遺　構	記　号	遺　構	記　号
竪穴住居跡	RA	土　　坑	RD	溝、大　溝	RG
建　物　跡	RB	竪穴･竪穴建物跡	RE	配石・集石	RH
柱　列　跡	RC	焼　　土	RF	そ　の　他	RX

7．本書に使用した地図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１「盛岡」である。

8．発掘調査に伴う出土遺物及び調査記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

9．発掘調査から本書の作成にあたり、次の方々から有益な御指導と御協力をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。(順不同敬称略)

本堂寿一、高橋與右衛門、本澤愼輔、近谷秀雄、金丸義一、川島茂裕（富士大学)、
誉田慶信（岩手県立大学)、工藤清泰（青森市教育委員会)、三島正之（中世城郭研究会)、
稲野彰子（いろは写房)、塚田直哉（上ノ国町教育委員会)

目　　次

Ⅰ　経　　過 …… 1
　1　遺跡の位置 …… 1
　2　調査経過 …… 2
Ⅱ　調査成果 …… 4
　1　北半部遺構（中世小規模城館と近世屋敷跡） …… 4
　　(1) 囲郭・区画施設 …… 4
　　(2) 建物跡 …… 8
　　(3) 竪穴建物跡 …… 10
　　(4) 土坑及びその他 …… 12
　2　南半部遺構（中世～近世環壕屋敷跡） …… 16
　　(1) 区画施設 …… 16
　　(2) 掘立柱建物跡・竪穴建物跡 …… 16
　　(3) 池・土坑他 …… 22
　　(4) 遺物 …… 26
Ⅲ　まとめ …… 30

挿図目次

第1図　上村屋敷遺跡位置図 …… 1
第2図　上村屋敷遺跡地形図 …… 3
第3図　北半部の遺構配置図 …… 5
第4図　北半部西側大溝 …… 6
第5図　北半部西側大溝土層断面図 …… 7
第6図　北半部東側大溝、虎口、柱穴群土層断面図 …… 8
第7図　北半部東側大溝、虎口、柱穴群 …… 9・10
第8図　北半部掘立柱建物跡 …… 11
第9図　北半部掘立柱建物跡、竪穴建物跡 …… 12
第10図　北半部の遺構全体図 …… 13・14
第11図　南半部の遺構配置図 …… 17
第12図　RG2100大溝 …… 18
第13図　南半部掘立柱建物跡 …… 19
第14図　南半部竪穴建物跡 …… 20
第15図　南半部竪穴建物跡 …… 21
第16図　南半部遺構全体図 …… 23・24

第17図　土器、須恵器系、常滑 …… 30
第18図　常滑、信楽、京他 …… 31
第19図　瀬戸・美濃、唐津 …… 32
第20図　国産染付、中国陶磁器 …… 33
第21図　石　臼 …… 34
第22図　遺構変遷 …… 40
第23図　上村屋敷遺跡、柿木平遺跡　中・近世溝 …… 41

表　目　次

表 1　調査一覧 …… 2
表 2　掘立柱建物跡一覧 …… 25
表 3　竪穴建物跡一覧 …… 25
表 4　土坑、池跡一覧 …… 26
表 5　土器一覧 …… 35
表 6　陶磁器一覧 …… 36

図 版 目 次

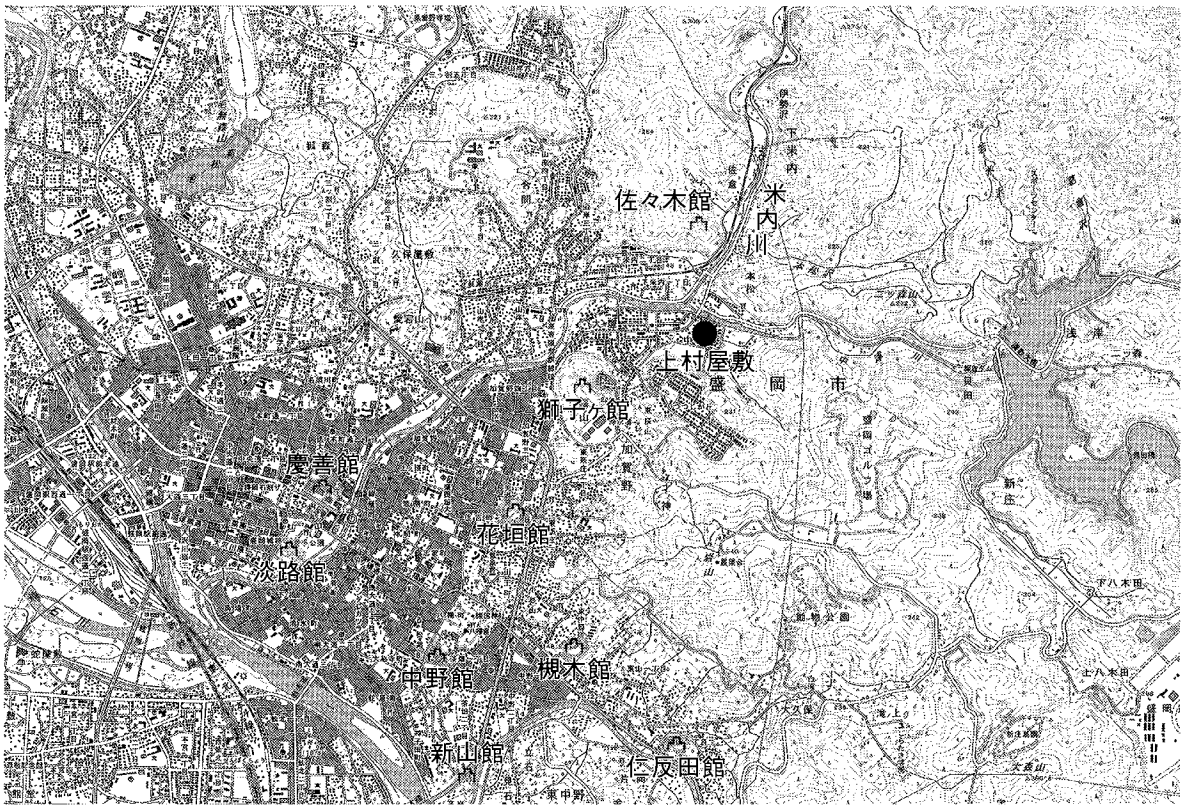
第 1 図版　上村屋敷遺跡陶磁器
第 2 図版　北半部の遺構群
第 3 図版　南半部の遺構群
第 4 図版　北半部の遺構と調査状況
第 5 図版　南半部の遺構
第 6 図版　出土陶磁器
第 7 図版　出土陶磁器

Ⅰ　遺跡の位置と調査経過

1　遺跡の位置と範囲（第１図、第２図）

位　　置　上村屋敷（わむらやしき）遺跡は、中津川と米内川合流点の南東側に形成される、河岸段丘の北面に立地する。この河岸段丘は東を八木山、南を稲久保遺跡のある丘陵に限られ、北側と西側は中津川の侵食による段丘崖となる。段丘面の広さは東西が約500m、南北が約320mで、中津川河床面との比高は約３m～４mである。この段丘北西部には縄文時代中期の集落跡を中心とする柿ノ木平遺跡が存在し、東方山麓部には縄文時代、弥生時代から古代、中世に至る堰根遺跡と向田遺跡が存在する。上村屋敷遺跡はこれらの遺跡の中間に存在し、東西80m、南北140mの範囲で、発掘調査では縄文時代中期の竪穴住居跡、土坑のほか、平安時代の竪穴住居跡、中世後期の小規模城館跡、近世環壕屋敷跡などが発見されている。

周辺遺跡　西側の柿木平遺跡では縄文時代中期から後期にかけての大規模な集落跡のほか、平安時代の集落跡、中世後期から近世にかけての集落跡が確認されている。東側の堰根遺跡では、縄文時代早期及び中期の集落跡、平安時代の大形掘立柱建物を含む集落跡、中世集落跡が確認されている。さらに、南東側の向田遺跡では、縄文時代早期から晩期の遺物のほか、弥生時代前期の集落跡、古代から中世の土坑



第１図　遺跡位置図（1：50000）

や溝が確認されている〔盛岡市・盛岡市教委2003〕。中世遺跡では中津川対岸の薬師社脇遺跡、落合遺跡では12世紀後半ごろの集落跡が確認されているほか、平地を俯瞰する丘陵先端部や盛岡城下開府以前の古道に沿った地点などには佐々木館跡、花垣館跡、中野館跡、新山館跡があり、中津川北上川合流点には近世盛岡城の前身である不来方(こずかた)城（慶善館、淡路館）などの中世城館跡が存在する。中世の不来方は伝馬が常備（『福士家文書』）された交通の要衝であり、浅岸地区はこの街道の東側に位置して、中津川沿いに閉伊方面に向かう街道の分岐点であった。

2　調査の経過

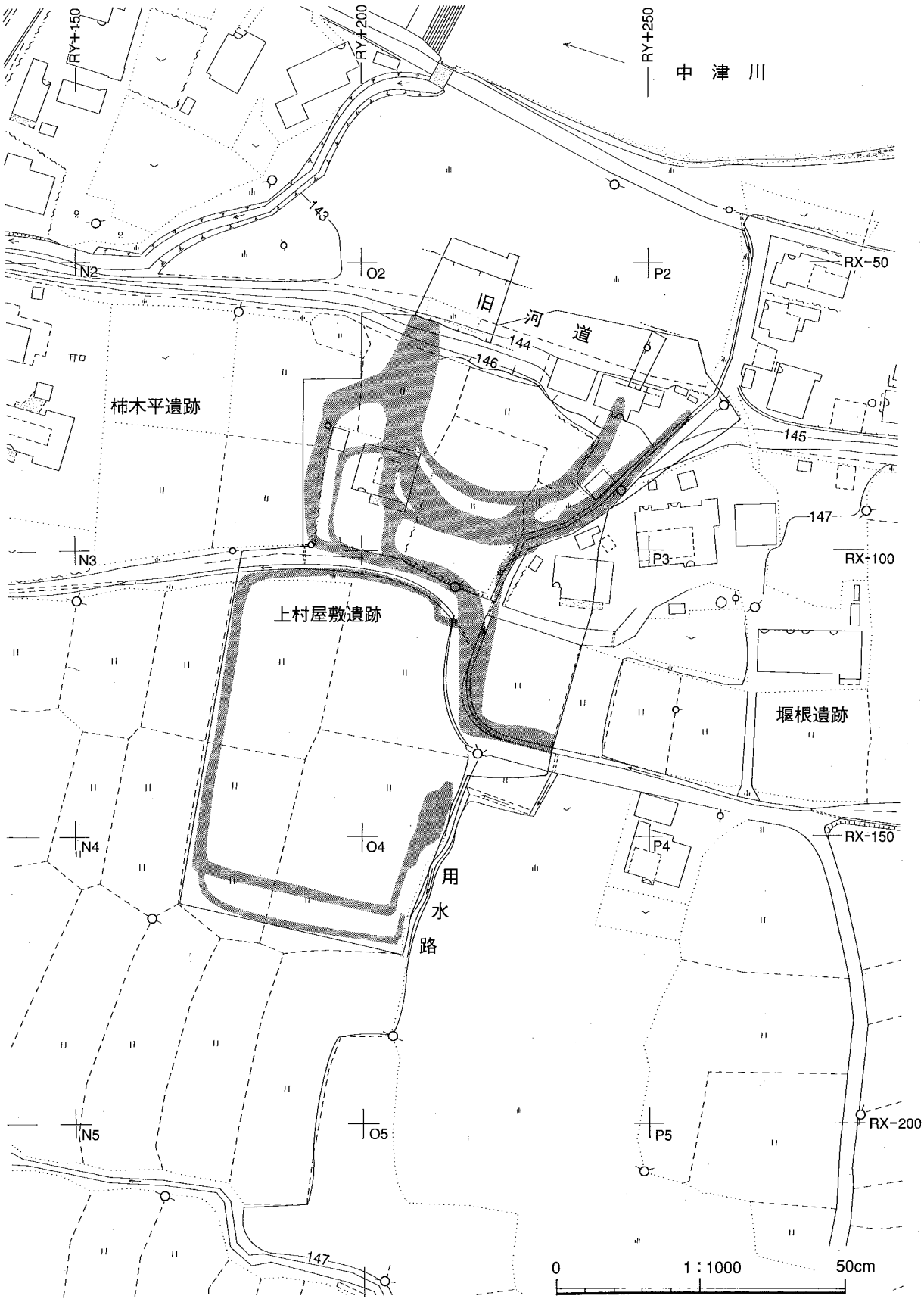
第１次調査　上村屋敷遺跡の第１次調査は、柿ノ木平遺跡第６次調査として、昭和57年度に個人住宅新築のため実施された。場所は今回報告する南側環濠屋敷の北部にあたり、縄文時代中期の土坑のほか、近世の曲屋を含む掘立柱建物跡群や土坑などが調査されている〔盛岡市教委1983〕。

平成９年（1997）、浅岸地区区画整理事業に先立ち、周辺遺跡と合わせて試掘調査を実施したところ、中世から近世の柱穴群や竪穴、土坑、大溝など多くの遺構が検出された。この本調査は平成10年度（1998）から着手し、平成14年度（2002）まで７次にわたって実施している。平成８年度以後もしばらくは柿木平遺跡として調査を実施したが、遺跡の主体となる時代と性格が中世の小規模城館と近世環濠屋敷跡であることから、地元の俗称を採り、上村屋敷遺跡として柿ノ木平遺跡から分離した。

遺　跡　名　なお、本遺跡第１次調査（柿ノ木平遺跡第６次調査）報告書〔盛岡市教委1983〕には佐羽内屋敷の俗称を記すが、実際には上村屋敷と呼ばれている。

次数	所在地（地区）	調査原因	面積	期　間	検出遺構と遺物等
1 (6)	盛岡市浅岸字柿木平 （遺跡南半部中央）	個人住宅建築	310㎡	82.6.15 ～8.12	縄文中期土坑・古代土坑・ 近世屋敷跡・近世陶磁器等
2 (8)	盛岡市浅岸字柿木平 （遺跡北側段丘崖）	個人倉庫建設	5㎡	87.11.06 ～11.7	遺構遺物なし
3 (19)	盛岡市浅岸字柿木平 （遺跡北半部）	区画整理	1,100㎡	98.04.10 ～10.30	縄文時代集落・中世小規模城館・ 近世屋敷・縄文土器・中近世陶磁器
4 (22)	盛岡市浅岸字柿木平、上村 （遺跡南半部と北側段丘下）	区画整理	2,010㎡	99.04.08 ～09.12	近世環濠屋敷跡・中近世陶磁器・ 土器
5 (23)	盛岡市浅岸字柿木平 （遺跡北半部西側）	区画整理	312㎡	99.09.01 ～11.15	中近世区画溝
6 (25)	盛岡市浅岸字柿木平、上村 （北半部東側と南半部北東部）	区画整理	1,267㎡	99.9.12 ～12.10	中世小規模城館ほか
7	盛岡市浅岸字柿木平 （北半部北東～段丘下）	区画整理	1,060㎡	02.08.05 ～09.17	中世小規模城館ほか

表１　上村屋敷遺跡発掘調査一覧表



第２図　上村屋敷遺跡地形図（1：1000）

Ⅱ　調査の成果

1　北半部の遺構

(1)　囲郭施設及び関連遺構（第３図～第７図）

大溝、溝（第３図～第７図）

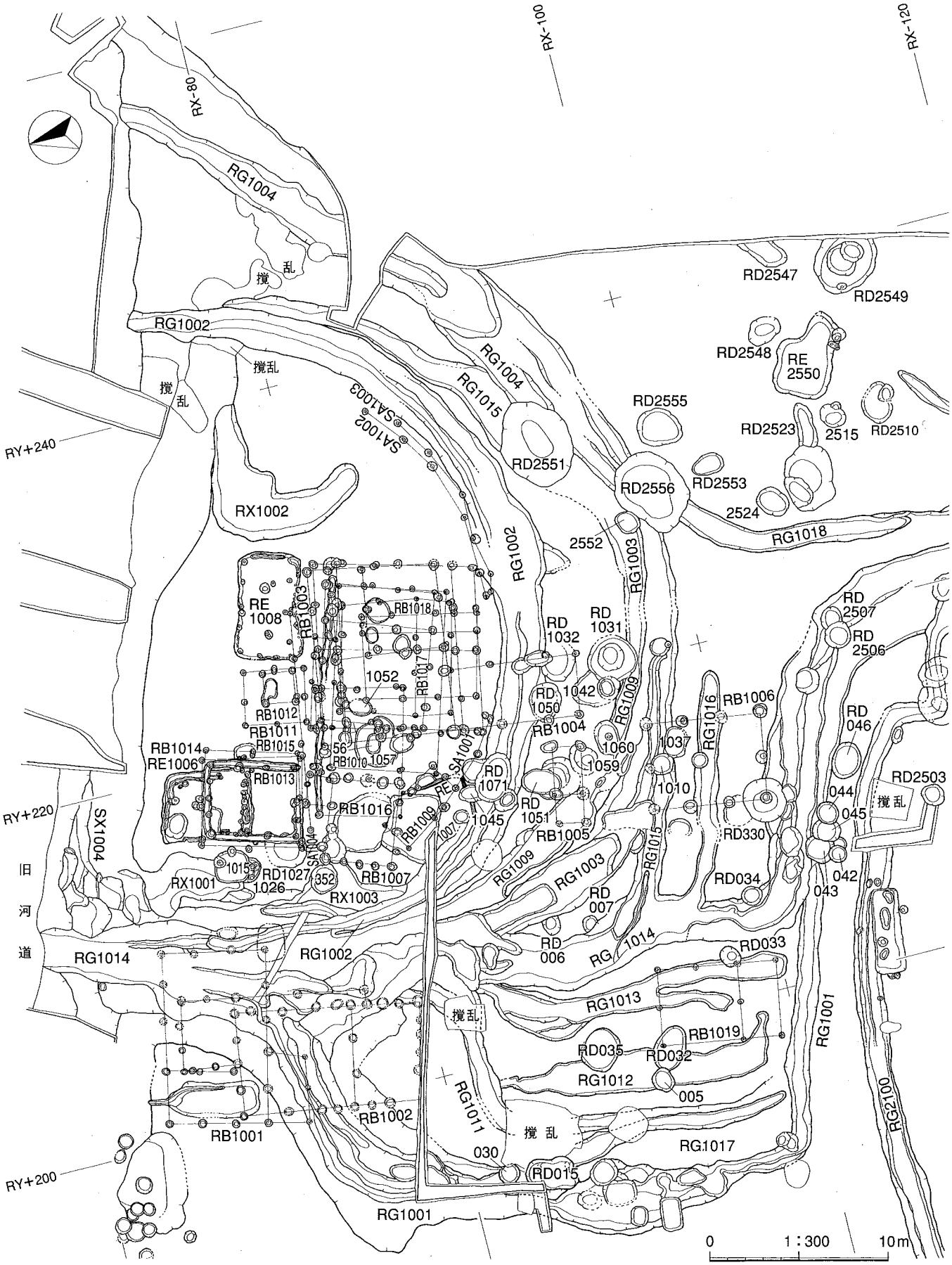
囲郭状況　北側の段丘崖に面して、南北約22m、東西約32mの範囲を、RG1002、RG1003の２条の弧状の大溝によって囲郭している。この２条の大溝は埋土の堆積状況から、併存していたと考えられる（第４・５図）。また、RG1002に切られるRG1010が存在するが、囲郭施設となるかどうか明確でない。RG1009はRG1002とRG1003の間に残存する溝であるが、RG1002、1003よりも古い溝である。東方の堰根遺跡から流れてくるRG1014は、南半部環壕屋敷の北東側を通じ、北に向きを変えてRG1005、1007の２条が合流し、西側ではRG1014はRG1003にほぼ重複しながら北側段丘崖に流れ出る。この部分ではこの溝には西側からRG1001、1011、1012、1013、1017の５条の溝が合流するが、RG1001はRG1014よりも早い時期に埋没している。以上の溝のなかで最後まで機能していたのはRG1014で、出土陶磁器から18世紀後半～19世紀前半ごろ埋没し、概ね平坦になっている。溝の埋没後には掘立柱建物RB1001、1002が建てられる。

埋　　土　埋土（第６図）はSD1002、1003の一部（Ｆ層）が人為的に埋め戻されるなど、Ｄ層以下には人為堆積の部分が認められるが、Ａ層～Ｃ層は自然堆積である。Ａ層、Ｂ層は黒褐色土主体の土層、Ｃ層は黒褐色土主体で黄褐色ないし褐色のシルト粒が混入する土層で、基本的に自然堆積であるが、一部人為堆積の可能性がある。Ｄ層は黒褐色土と暗褐色土、褐色土が混合する人為堆積土。Ｅ層は小礫やシルト粒を多く含む暗褐色土で人為堆積土。Ｆ層は黒色土、黒褐色土、褐色土の混合土で、RG1002の底部に堆積した部分には炭化物や焼土粒が混入する。なお、実測図の罹災のため図示しないが、SD1014のＣ層～Ｄ層上面には、径20cm～40cm大の礫群で土手を造り、溝の底部に水田状の区画を複数構築していることが確認された。

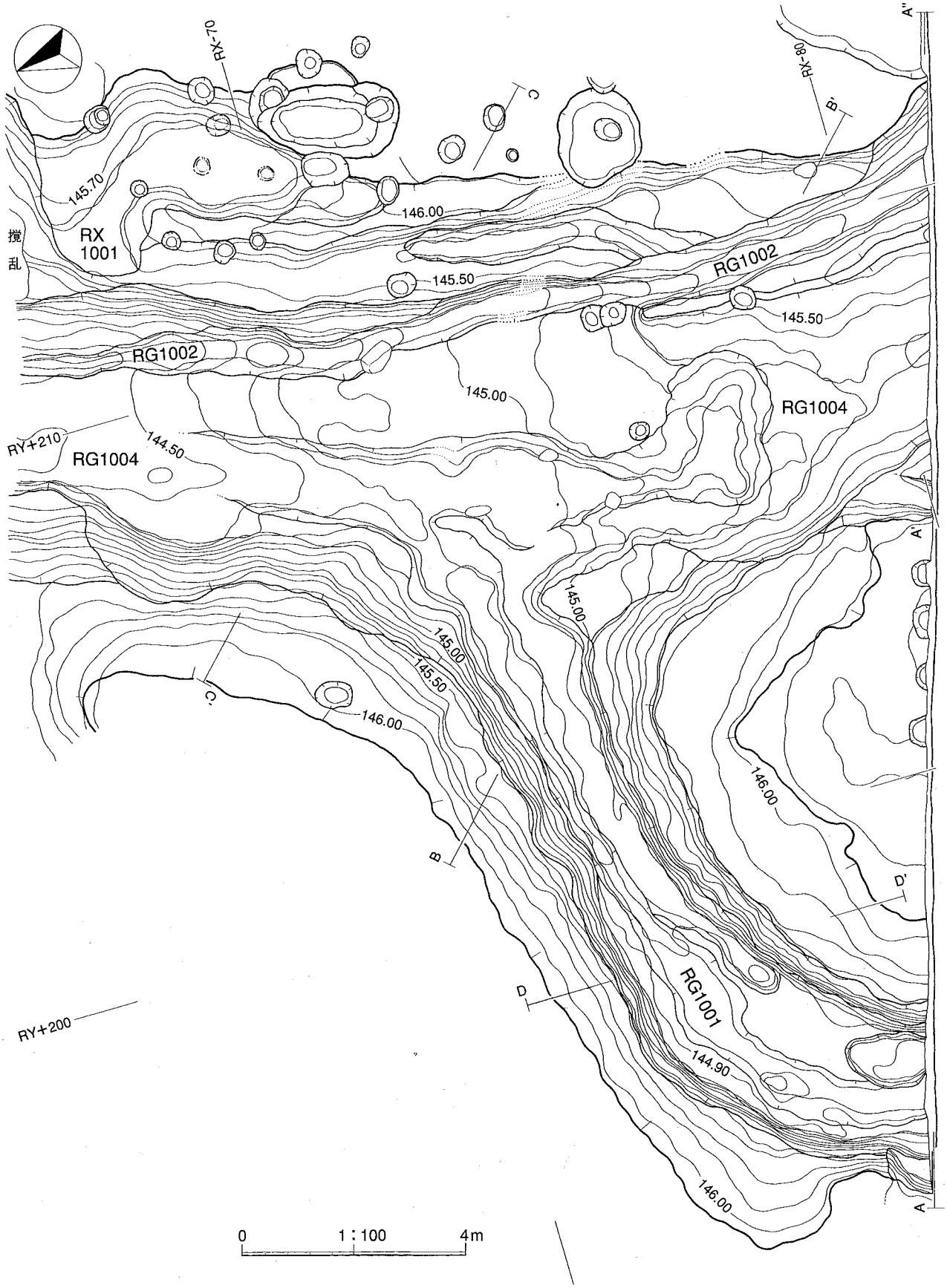
囲郭部分の南東部から北東部にかけては、RG1002とRG1003をRG1015が切り、RG1015をRG1004が切る。RG1003とRG1009の東部はRG1004に切られて判然としないが、周辺地形から考えてRG1004と概ね同位置に存在したと推定される。RG1004とRG1018、RG1014の重複関係は判然としない。

虎　口（出入口）（第３図、第７図）

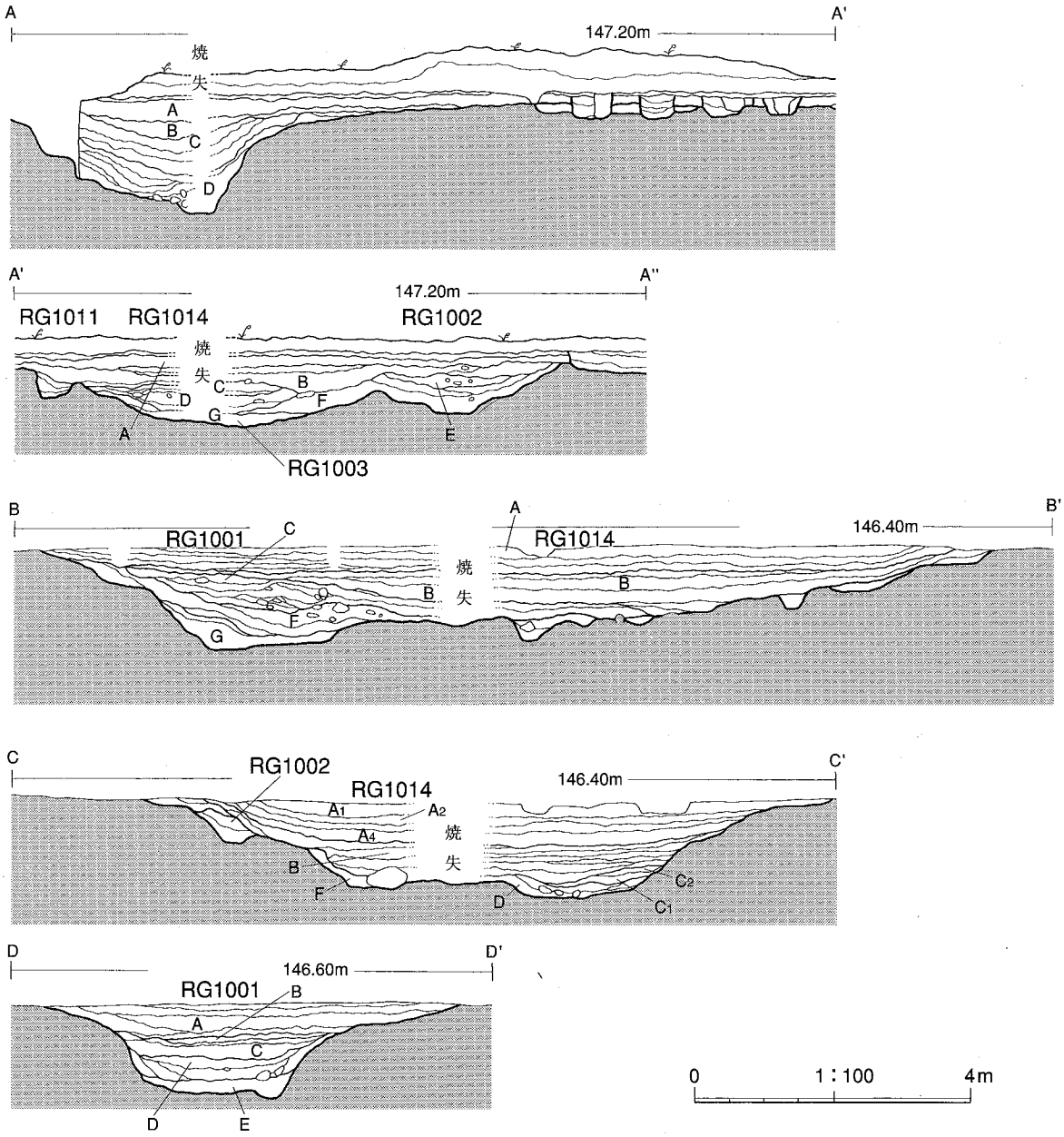
郭内への虎口（出入口）は、北西部と北東部の２箇所で確認されている。いずれも平場の末端を溝状に掘り込んだ通路遺構で、北西部のRX1001は郭内に向かって右側に折れて入るが、SD1014に入口側を切られている。埋土は黒褐色土主体で自然堆積である。この北側段丘崖には、段丘下から登る踏段状の通路（RX1004）が存在し、RX1001入口付近に到達する。北東部のRX1002は郭内に向かって左側に折れて郭内に入るように造られている。埋土は暗褐色土主体で人為堆積。特に上層部は礫を多



第３図　北半部の遺構（1：300）



第４図　北半部西側大溝（1：100）

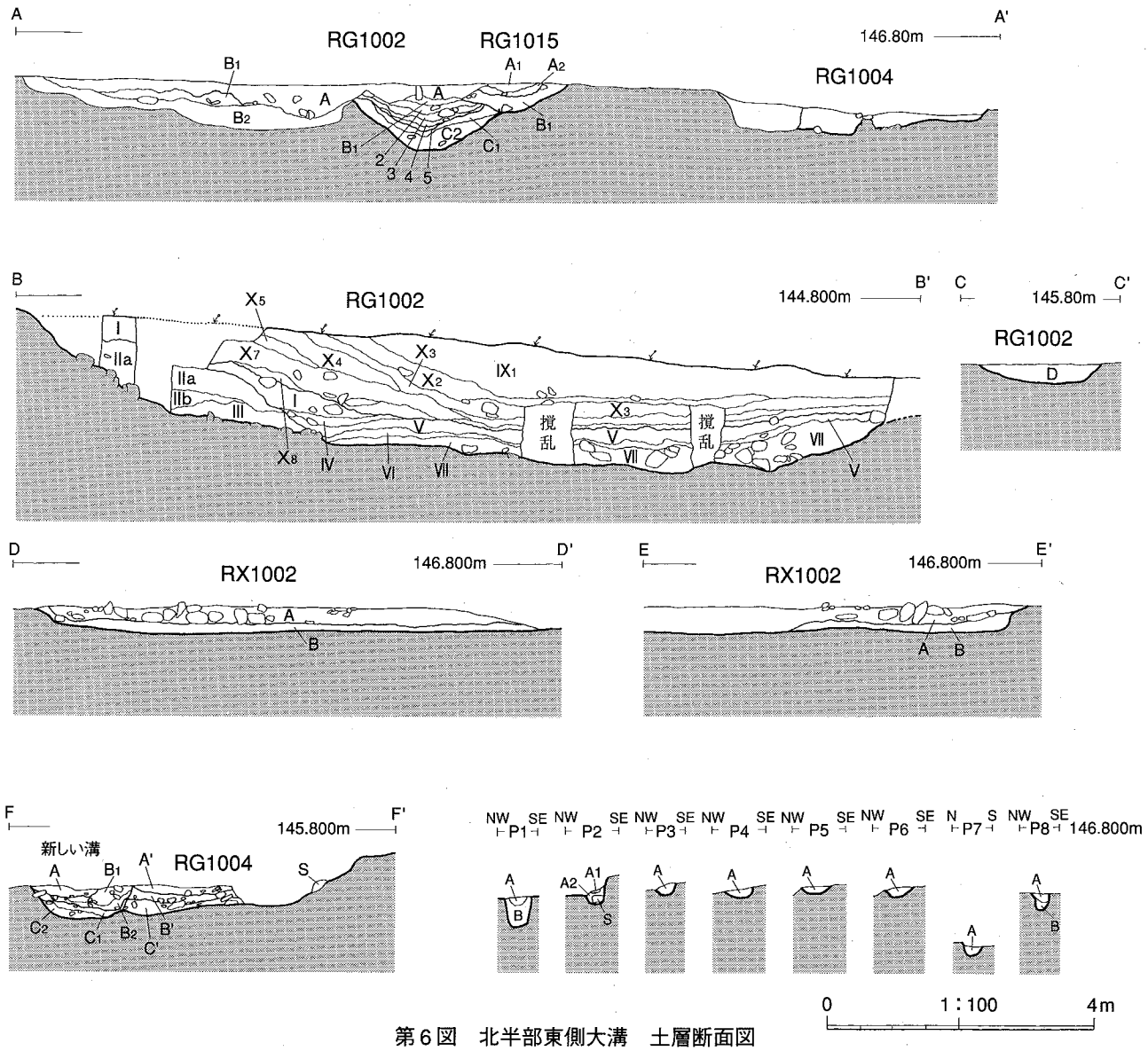


第５図　北半部西側大溝　土層断面図（1：100）

く含み、近世以後の陶磁器類が出土している。このSX1002内部には３口の柱穴があるが、この出入口に伴うものか重複遺構なのかは判然としない。このほか、郭内西側のRX1003も位置とプランから出入口の可能性がある。

柱　　列

SD1002大溝の内側に添って弧状の柱列が２列存在する。南西部にSA1001、南東部にSA1002・1003の２列を確認できる。柱の間隔は2m～2.9mである。このうちSA1001には１間×２間の簡易な掘立柱建物SB1009が付属する。



第６図　北半部東側大溝　土層断面図

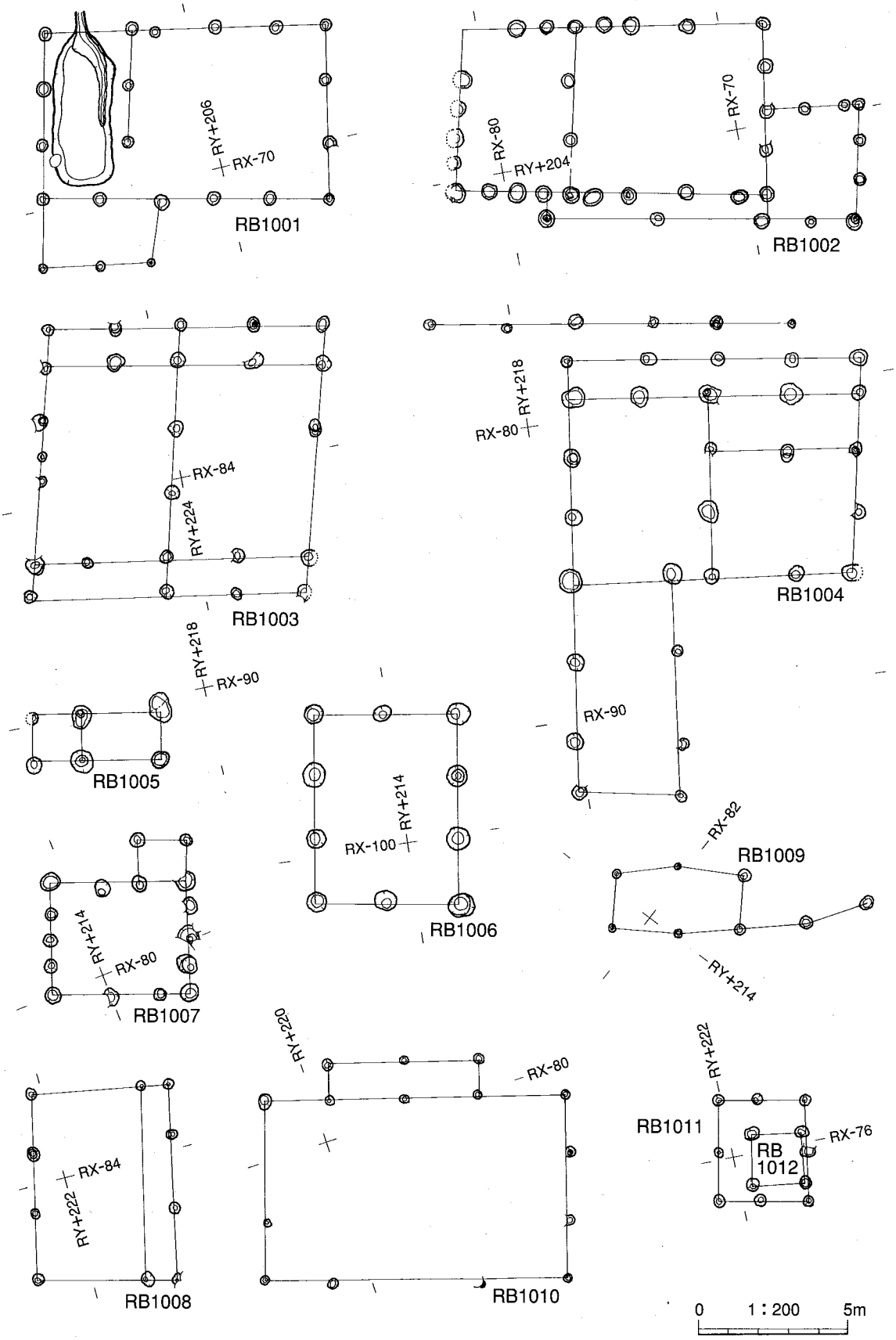
(2)　郭内、郭外の遺構

掘立柱建物跡

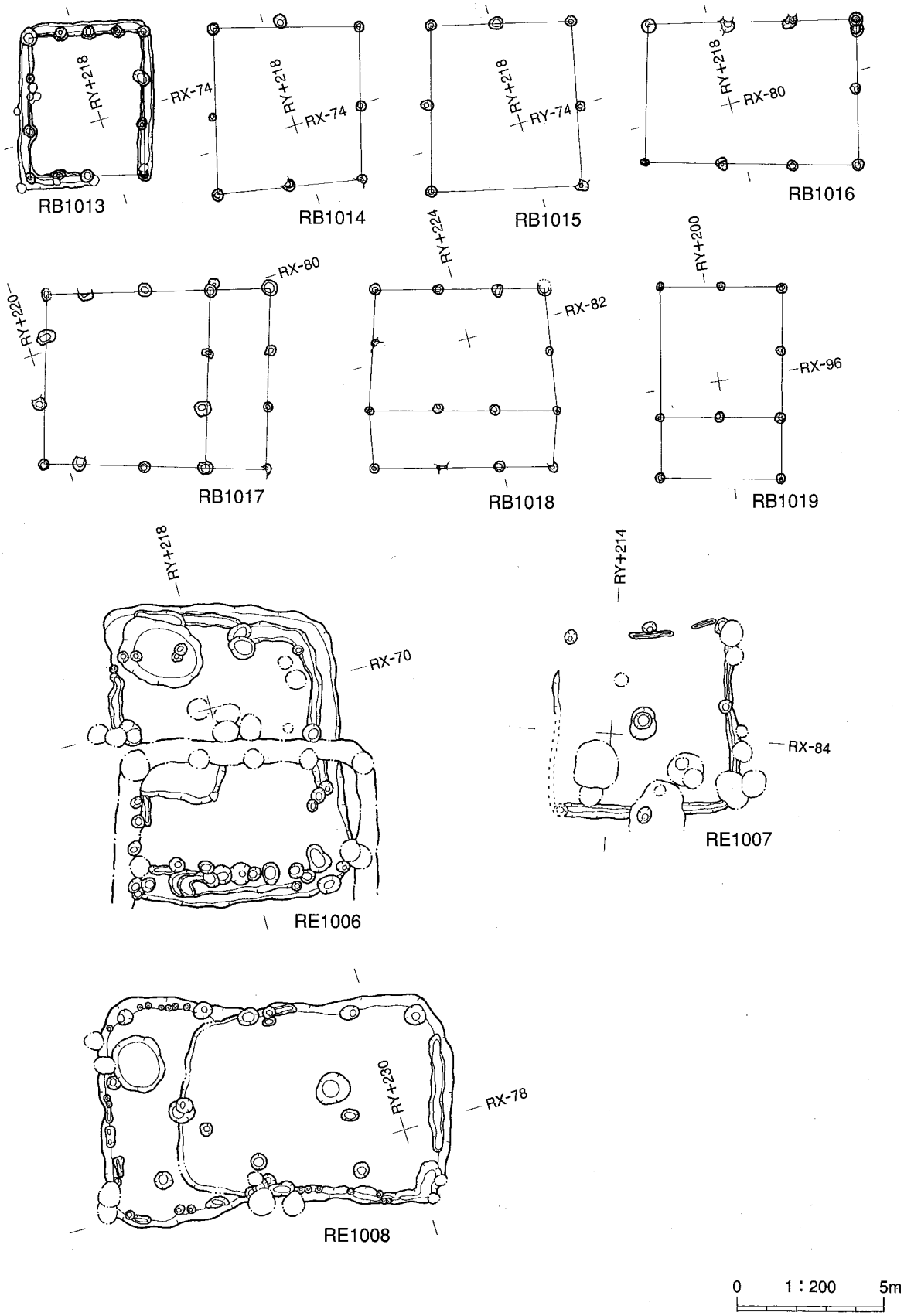
重複関係　北半部で19棟の掘立柱建物跡が確認された。このうちRB1001と1002はRG1014が埋没した後に建てられており、囲郭施設や溝よりも新しい遺構である。また、RC1003に付属するRB1009は、RE1007竪穴建物より古く、RG1002大溝に伴う可能性のある建物と柱列である。RB1013はRB1014、1015の建物とともに、RE1006竪穴建物の埋土を掘り込んでいる。

建物の身舎で見ると、平面が１間×１間の建物（RB1012）、１間×２間の建物（RB1005・1009）２間×２間の建物（RB1014、1015）、２間×３間の建物（RB1006、1008、1016、1018）、２間×３間の両妻に半間の柱を入れるもの（RB1007、1013）、３間×４間の建物（RB1003、1004、1010、1017）、３間×５間の建物（RB1001）、３間×5.5間の建物（RB1002）がある。このうちRB1001は身舎西端に

第７図　北半部東側大溝・虎口・柱穴群（1：100）



第８図　北半部掘立柱建物跡



第９図　北半部掘立柱建物跡　竪穴建物跡

13・14

第10図　北半部の遺構（全）

小溝を伴う土坑があり、南側桁行西端に１間×２間の下屋を持つ。RB1002は南北２間取り南妻と東西桁行に半間の柱を入れ、東側に４間分の下屋、北側に２間×３間の張出しがある。RB1003は東西２取りで桁行の南北２面に下屋を持つ。RB1004も東西２間取りで桁行北側に下屋、南側桁行西端に１間×３間の角屋を持つ。RB1007は内部にRD1018土坑が伴う可能性が高く。北側東端に１間×１間の張出しがある。RB1010は北側中央に２間分の下屋を持つ。以上の建物のうち、RB1008、1009、1010、1018の各建物は、柱穴の埋土が黒褐色土主体のものが多く、しかも新しい柱穴や土坑に切られていることから、他の建物よりも年代が古い可能性がある。

竪穴建物跡

郭内の北西部にRE1006、南西部にRE1007、中央部にRE1008の３棟が存在する。

RE1006はRB1013、1014、1015に掘り込まれている。周溝や柱穴の状況から１度建替えが行われている。壁の高さは10cm程度残存し、埋土は人為堆積で多量の炭化材や炭化物が混入している。RE1007はRG1002大溝、RB1009掘立柱建物跡を切り、RD1012土坑に切られている。西壁は明確にできなかったが、他の３辺の壁には周溝を伴う。４隅と中央に柱穴が存在する。壁高は15cm～18cm残存する。埋土は人為堆積である。

RE1008は中央部がやや狭い隅丸長方形の竪穴建物である。壁の高さは10cm～15cm、四周壁は周溝が伴う。一度西壁を縮小していることが確認されている。埋土は人為堆積で、一部に炭化物が混入する。

土　　坑

北半部で48基の土坑が確認されている。郭内西部から南西部にかけて集中し、大溝よりも新しいものが多い。プランは長方形、方形、円形、楕円形、不整形とさまざまであるが、多くの場合人為堆積である。土坑の時期は重複関係や埋土、出土遺物から、郭内北西部のRD1027土坑は中世小規模城館に伴う可能性があるが、他の土坑は近世もしくは近世以後の土坑が主体を占める。

焼　　土

焼土はRF1001とRF1002の２基確認されている。このうちRF1001は径80cmほどの円形で、位置関係からRB1004またはRB1003の掘立柱建物跡に伴う可能性がある。

2　南半部の遺構群

(1)　環壕屋敷の位置と規模

遺跡南部には近世環壕屋敷跡の遺構が確認された。北半部遺構群との間には、西方柿ノ木平遺跡から本遺跡中央を通じ、東方堰根遺跡に通じる幅3mの道路が存在し、環壕屋敷北東部を取り巻くように曲折している。北半部の遺構のうち、RG1014大溝は、この道路に併行または重複している。RG1001、1014溝とRG2100（環壕北辺）との間は幅1.8m～3mの空間となり、現状道路に繋がる前身道路遺構と考えられる。北半部の溝のほとんどはRG1014とに重複するか合流している。調査段階まで道路の側溝に流れていた用水は、堰根遺跡、向田遺跡東側の山裾を流れる大馬手（おおまて）堰から取水されていたが、向田遺跡や堰根遺跡の調査結果から、寺沢の沢筋に沿ってRG1001（RG1014）が存在し、本来の水源はこの沢水であったことが解る。

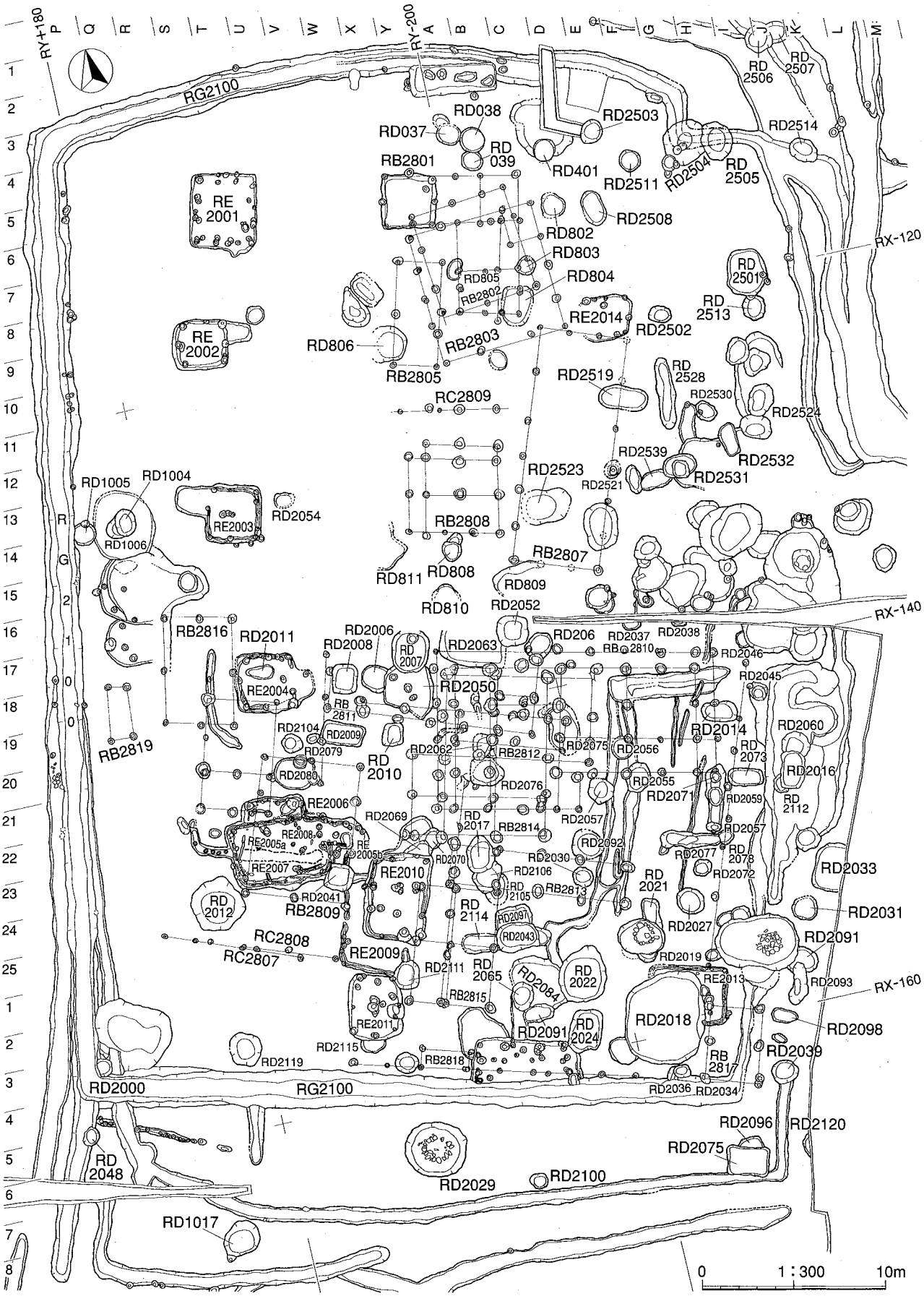
環壕屋敷の区画は新旧ともに1区画であり、旧期では南北57m、東西43m、新期では南北62m、東西43mの長方形プランである。環壕は新旧ともに完全結界ではなく、東辺中央部が池になり、池の北側が開口している。東辺の開口部北側部分はRG1014溝から分岐しており、ここから大溝内部に取水している。東辺中央の池には明確な取水溝は検出できなかったが、調査以前、18m東の地点でRG1014から南に分岐し、池の東側を通じて南側水田に引水される用水路が存在した（第2図）ことから、この用水路から引水していた可能性が高い。この環壕屋敷は、東方から引水した用水路が、柿ノ木平の台地北側地域と、中央部から南側地域の水田地帯とに分岐する地点に存在することになる。

(2)　区画施設

環　　壕

旧　　期　旧期のプランを構成するRG2100大溝は、東西36.5m～46m、南北57mの範囲を大略長方形に囲郭する。西辺と南辺は直線に開削されて規模も大きいが、北辺の部分は道に沿って弧を描くが、その東端部は不明確である。また、南辺から続く東辺の南側は、細い溝となって池に通じている。西辺と南辺の規模は幅1.8m～2.1m、深さ70cm～85cmあり、底面は80cm～120cmの幅で平坦になっている。壁面、底面ともに丁寧に掘られており、壁面は底面から中ほどのところまでは急勾配で立ち上がり、壁の上半分は緩く外傾する。西辺では新期の環壕（区画溝）のRG2002やRG2003、2004に上部を切られている。埋土はほとんどが自然堆積であるが、南辺の中央付近では最上層に人為的に埋め戻された部分が認められた。それ以外の部分では埋土のA層は黒褐色土主体。B層とC層は暗褐色土主体または暗褐色土や黒褐色土、地山の黄褐色シルトの混合土である。最下層には少量の砂の堆積が認められた部分もある。

新　　期　新期のプランを構成するRG2002溝は、南辺部がRG2100よりも6m～7m拡がるほかは、概ね旧期のRG2100大溝に重複する。北東隅部分では溝が内側に屈曲し、鬼門除けの隅欠けになっている。溝の規模は小さく、幅60cm～1m、深さは検出面から10cm～30cmである。溝は水田床土直下で検出されているが、埋土は黒褐色土または暗褐色土主体で自然堆積。土質は水田耕作土にやや近



第11図　南半部の遺構配置図

く、新しい感じで、堆積は近世末以後にまで降る可能性がある。

内部区画溝等

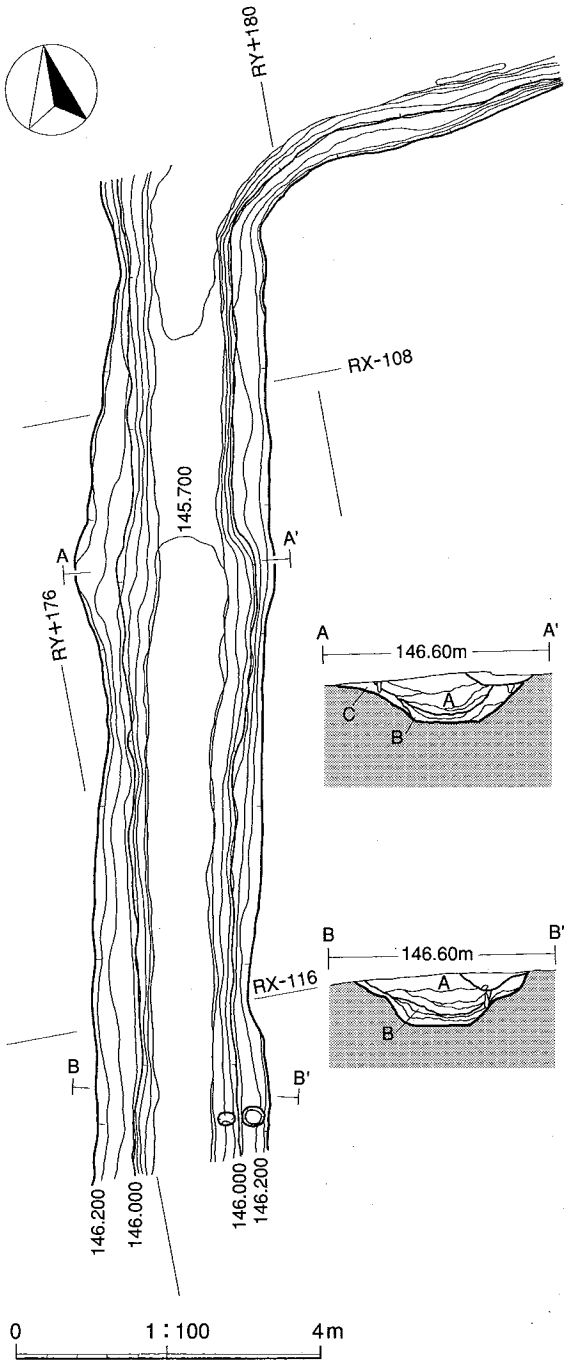
環壕の内部にはRG2003、RG2009A・Bの溝が存在する。また、RG2100大溝南西隅南側にあるRG2013溝は、底面に杭状の小ピットが並列し、柵の布掘溝の可能性が高い。ほかにRG2003、2009に重複してRG2004小溝群が存在する。

柱　列・柵

柱　列　旧期のRG2100大溝南辺に沿ってRC2805掘立柱列跡があり、中央にRB2818門跡が取付く。東辺には溝や池に併行してRC2810が存在する。西辺、北辺の掘立柱列については不明である。屋敷地南西部にはRC2807・2808の2条の掘立柱列が重複する。この2列はRG2100大溝の南側にあるRG2013と方向が近い。また中央部にRC2806が存在する。

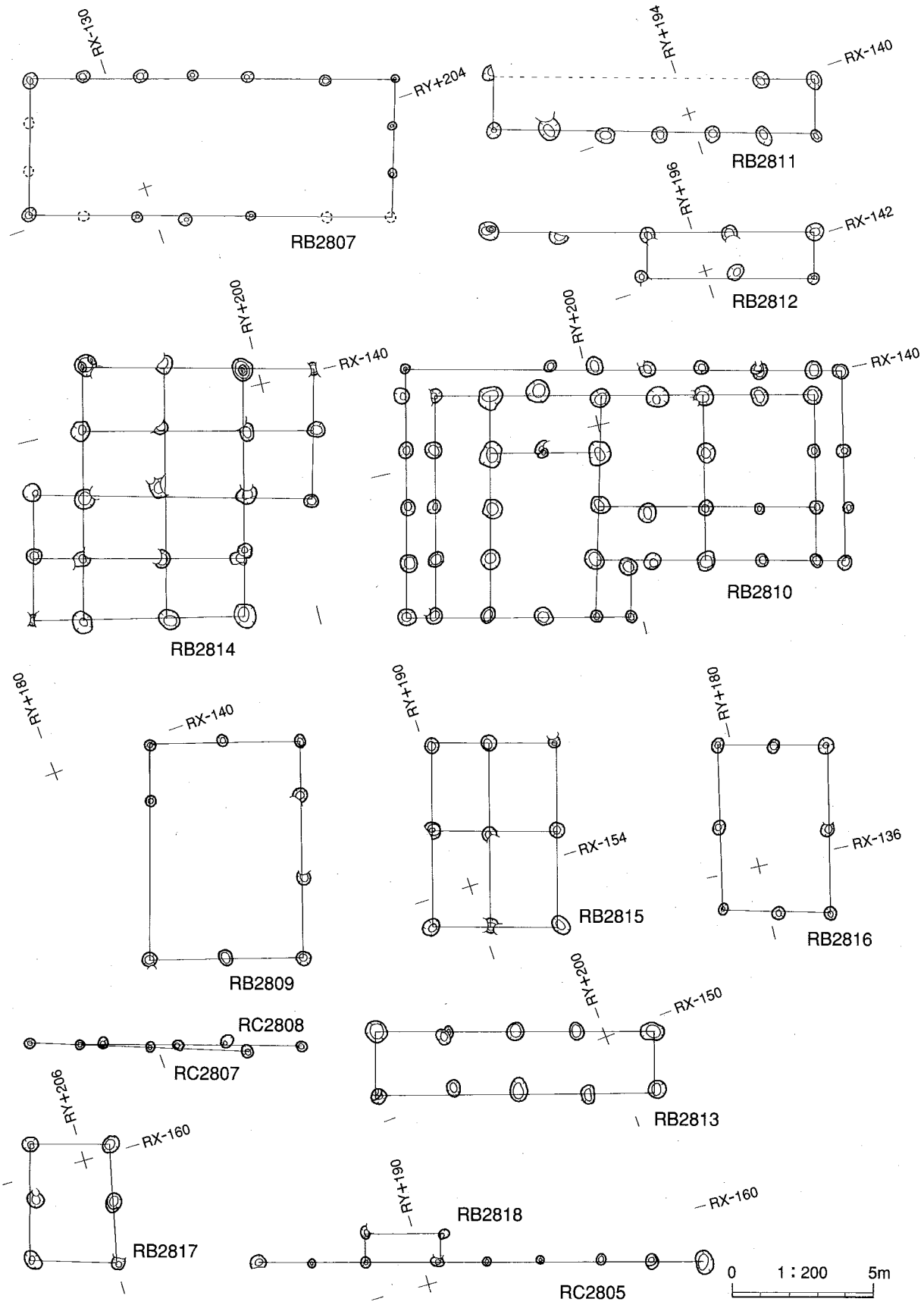
掘立柱建物跡

屋敷地北部については、1982年度の第1次調査において、8棟の掘立柱建物跡と1列の掘立柱列が確認されている。今回第1次調査区周辺部を含んで調査した結果、新たに12棟の掘立建物跡が確認された。第1次調査で確認されていた建物のうち、RB2807（旧RB807）は北妻の下屋がなくなり、3間×6間の建物であることが判明した。また、RB2805（旧RB805）は2間×1間の南北棟と判明している。

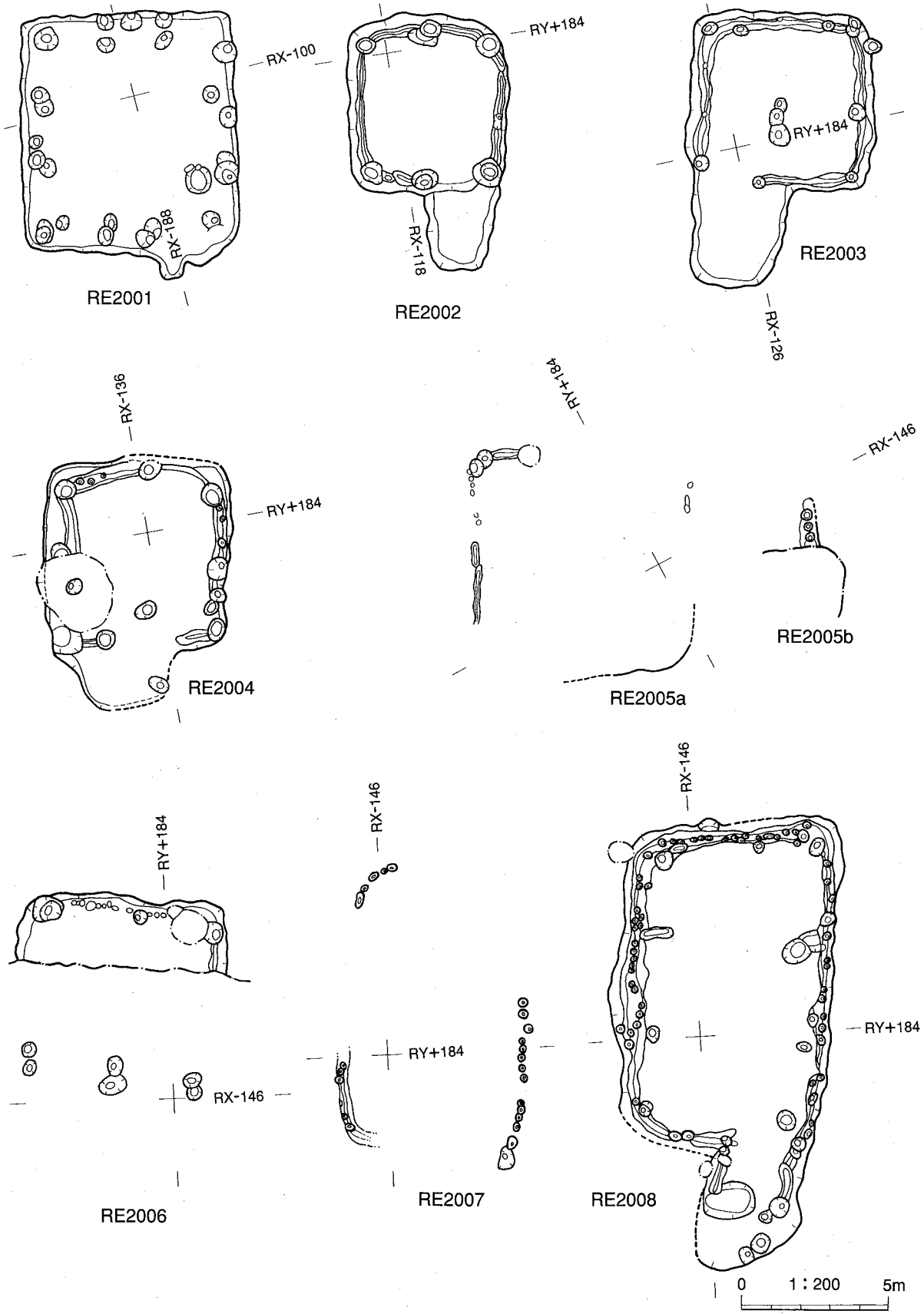


第12図　RG2100大溝

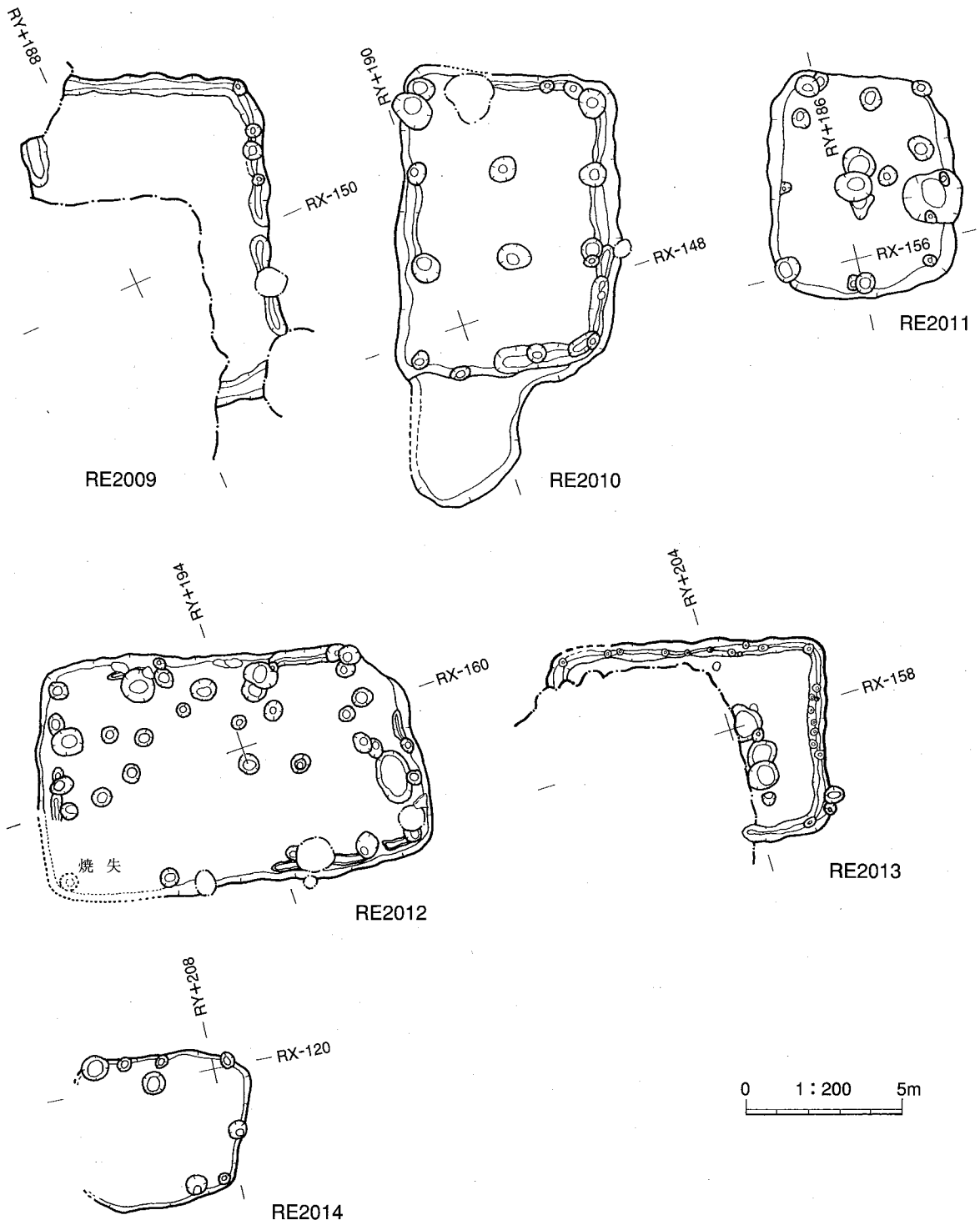
新たに確認された建物跡のうち、建物規模から主屋と考えられるのはRB2810、RB2814の2棟である。このうち中央やや東よりに確認されたRB2810は、3間×4間の南北棟の東側に同規模の東西棟をL字形に接合し、2間×2間の2室と3間×2間1室を食違いに配し、2間×2間2室の南側と3間×2間の1室の西側に広廂または広縁、南面を除く3面に下屋または縁をまわした構造である。この建物付近は柱穴の重複が著しく、RB2810に近似した規模、構造の建物が同位置で建て替えられている可能性があるが、今回は代表的な1棟のみ図示した。この建物の西側に重複するRB2814は2間×4間の総柱で、身舎の西面、東面の2面に2間づつの廂が取り付くものである。この建物と



第13図　南半部掘立柱建物跡（1：200）



第14図　南半部竪穴建物跡（1：200）



第15図　南半部竪穴建物跡

区画溝のRG2009は併行する位置関係にあり、共存していた可能性が高い。北部のRB2807も、廂や間仕切りなどは認められていないが、規模から考えて主屋であった可能性がある。また、RB2811・2812の２棟は、廂を有する建物の一部とみられるが、全体像は明確でない。これら以外の付属棟と見られる建物には２間×３間のRB2809、2819、２間×２間のRB2815、2816、２間×１間のRB2817、１間×４間のRB2813、１間×１間のRB2818、2820がある。このうちRB2818・2820の２棟は、環壕に面しているところから簡易な薬医門と考えられる遺構である。

竪穴建物跡

環壕の内部から15棟の竪穴建物跡が確認された。屋敷地の西辺と南部に多く分布し、屋敷地の北東部には小形のRE2014のみである。これら竪穴建物は、屋敷地周縁部の付属棟らしい小形掘立柱建物との重複関係はあるが、中心部の主屋となる大形の掘立柱建物との重複はない。規模、構造は方形プランで３間×３間の柱配置のRE2001。方形プランで２間×２間、または２間×１間の柱配置のRE2002、2003、2004、2006。長方形プランで２間×３間、または１間×３間のRE2008、2010、2012。長方形プランで壁材を立てた溝が廻るRE2007、2009、2013。長方形で２間×２間のRE2011。不整方形で２間×２間とみられるRE2014。方形の２棟、または長方形の１棟とみられるが不明確なRE2005に分類できる。このうちRE2001、2002、2003、2004、2008、2010の竪穴建物には、妻の片側、または中央に舌状の出入口が張出している。竪穴の床面は平坦で硬いが、地床炉などは認められない。

竪　穴、池

屋敷地西辺の中央部にはRE2015、2016、2017の円形の竪穴が重複する。RE2016には東側に張り出しが存在する。埋土から近世以後の遺構で、RE2016の埋土中から漆器碗の破片が出土している。また、東辺中央部にはRE2018池が存在し、RG2100大溝東辺に接続している。

土　　坑

屋敷地内から146基の土坑が確認されているが、第１原図焼失のため、遺構番号の不明なものが多い。このうち、RD2022は内部に石積みの壁を構築した半地下式の室と見られるものである。

井　　戸

屋敷地内から３基の井戸が確認されている。円形、または楕円形の土坑を掘り、内部に石積みの井筒を構築するものである。いずれも2m程度の深さまで確認しているが、危険防止と保存のため底面までの精査は実施していない。

第16図　南半部の遺構（全）

掘立柱建物跡一覧表

建物	棟方向	総長（m）		身舎柱間		柱間寸法（m）		備　考
		桁行	梁間	桁行	梁間	桁　行	梁　間	
RB1001	N76° W	9.68	7.88	5間	3間	1.936×5	1.94×3	RG1014より新。西側に排水溝のある土坑と間仕切、
RB1002	N11° W	13.44	6.6	5.5間	3間	1.91×5+0.91	1.86×3	RG1014より新。半間柱、東側下屋、北側に2間×3間の張出
RB1003	N79° W	9.28	9.1	4間	3間	2.32×4	2.18×3	RB1004より古。南北2面に1.2mの下屋、東西2間取り
RB1004	N83° W	9.8	7.56	4間	3間	2.45×4	2.52×3	RG1002、RB1003より新。母屋、北側に1.28mの下屋、東西2間取り
	N17° E	7.26	2.38	3間	1間	2.44+3.1+1.72	2.38	角屋
RB1005	N78° W	4.32	1.62	2間	1間	1.62+2.7	1.62	RG1009、RD1051より新
RB1006	N9° E	6.33	4.84	3間	2間	2.11×3	2.42×2	RG1007、RD1010より新
RB1007	N69° W	4.641	5.16	3間	2間	1.547×3	1.88×2	内部にRD1018土坑、北側東に1間四方の張出、妻に半間柱
RB1008	N13° E	6.57	4.62	3間	1間	2,19×3	3.7	東側に0.95mの下屋
RB1009	N35° W	4.28	1.84	2間	1間	2.2+2.08	1.84～2.28	RC1003柱列に付属、RE2007竪穴より古
RB1010	N72° W	9.42	7.62	4間	3間	2.2+2.56+2.52+2.86	1.92+2.34+1.9	北中央に1.2mの下屋
RB1011	N10° E	3.4	2.88	2間	2間	1.7×2	1.3+1.58	
RB1012	N7° E	1.74	1.62	1間	1間	1.74	1.62	
RB1013	N16.5° E	4.83	3.9	3間	2間	1.61×3	1.95×2	布掘溝より永楽通寶、妻に半間柱、南妻東に出入口、
RB1014	N18° E	5.68	4.98	2間	2間	3.02+2.66	2.34+2.64	RB1015より新、
RB1015	N15° E	5.7	4.8	2間	2間	2.85×2	2.45+2.35	RB1014より古
RB1016	N76° W	7.05	4.95	3間	2間	2.74+2.01+2.3	2.4+2.55	
RB1017	N73° W	7.56	6.78	4間	3間	1.24+2.23+2.05+2.04	2.26×3	
RB1018	N74° W	6.58	4.28	3間	2間	2.4+2.0+2.18	1.96+2.32	
RB1019	N10° E	6.66	4.3	3間	2間	2.22×3	2.15×2	
RB2801	N12° E	7.43	3.33	3間	2間	2.58+2.58+2.27	1.36+1.97	母屋、西側に下屋付属するか？（RB801）
	N78° W	3.94	2.58	3間	2間	1.35+1.23+1.36	1.29×2	馬屋（RB801）
RB2802	N6.5° W	5.76	5.45	3間	4間	1.67+2.62.1.67	2.57+1.97+0.91	RB2801より新しい（RB802）
RB2803	N4.5° W	6.97	6,97	4間	4間	1.52+1.97+1.67+1.82	1.97+2.42+1.91.1.67	西側1間は下屋か？（RB803）
RB2804	N14° E	5.45	3.64	3間	3間	1.82++0.91+2.73	1.52+0.91+1.21	2間×2間か？（RB804）
RB2805	N14° E	5.6	2.42	2間	1間	2.88+2.72	2.42	
RB2806	N86° W	7.57	5.46	4間	2間	1.36+1.97+1.36+2.88	2·58+2·88	
RB2807	N3° E	12.73	3.98	6間	1間	1.21+2.72+1.82+2.12	3.98	北側に1.21mの下屋、1次調査で西側調査（RB807）
RB2808	N12° E	4.85	4.85	2間	2間	1.97×2	1.97×2	西、北に0.91mの下屋、南中央1.97m入口（RB808）
RB2809	N21° E	7.5	5.4	3間	2間	2.8+2.8+1.9	2.7	
RB2810	N78° W	15.34	8.6	7間	4間	1.915×7	1.915×4	東側4間分は梁間3間、西、北、東の3方に下屋 RB2811、2814より新
RB2811	N69° W	11.16	4<	6間	2間<	1.86×6	2.0×2<	
RB2812	N72° W	11.18	4.7	4間	1間	2.96×3+2.3	4.8	南側東2間に1.6mの廂
RB2813	N71° W	9.7	2.2	4間	1間	2.425×4	2.2	
RB2814	N14° E	8.8	5.5	4間	2間	2.2×4	2.75×2	東側北半に2.4m、西側南半に1.8mの廂、総柱
RB2815	N18° E	6.4	4.3	2間	2間	3.2×2	2.15×2	総柱
RB2816	N12° W	5.8	3.8	2間	2間	2.9×2	1.9×2	
RB2817	N15° E	4.1	2.9	2間	1間	2.05×2	2.9	ＲＥ2013より新
RB2818	N74° W	2.6	0.98	1間	1間	2.6	0.98	門
RB2819	N9° E	2.85	1.2	1間	1間	2.85	1.2	門
RB2820	N15° E	2.9	—	1間	—	2.9	—	門

竪穴建物跡一覧表

建物	棟方向	平面(m)	壁高(cm)	柱穴配置	出入口	長さ(m)	埋土	遺物	備　考
RE1006	N9° E	3.8×5.2		3間×3間	−	−	人為、炭化物多い		
RE1007	N2° W	3.1×3.4		2間×2間	−	−	人為、		RG1002を切る
RE1008	N74° W	3.9×6.1		1間×4間	−	−	炭化物少量混入		
RE2001	N15° E	3.7×4.1	25～30	3間×3間	南張出	0.4			
RE2002	N8° E	2.8×3.0	25～30	2間×1間	張出	1.35			
RE2003	N14° E	3.1×3.0	26～30	2間×2間	張出	1.75	自然		
RE2004	N9° E	3.2×3.3	14～16	2間×2間	張出	1.1	人為		RD501に切られる
RE2005	N27° E	3.7×4.0	25～30	−	−	−	人為		2m東にも周溝（b）あり
RE2006	N10° E	3.6×3.4	22	2間×1間？	−	−	人為		
RE2007	N83° W	3.2×5.0	25～30	−	−	−		永楽通寶鐚銭	
RE2008	N81° W	3.6×5.4	30	2間×3間	東張出	2.2			
RE2009	S12° W	3.9×5.4	10	−			人為		RD2111に切られる
RE2010	S17° W	3.55×4.75	20～25	2間×3間(?)	北張出	2.05	人為		
RE2011	N16° W	2.9×3.5	22	2間×2間(?)	−	−			
RE2012	N75° W	×6.1	15	2間×3間(?)	−	−			RG2100大溝を切る
RE2013	N75° W	3.15×4.4	10	−	−	−			RD2018に切られる
RE2014	N80° W	2.7×2.4	10	2間×2間	−	−			

土坑一覧表

旧番号	グリッド	平面形	長軸×短軸(m)	深さ(m)	埋 土	備 考
1010	O2-G24	円	0.62×0.6	0.35		RB1006を切る
1012	O2-G16	不整長方形	3.3×2.9	0.22		RE1007、RD1018を切る
1014	O2-E12	隅丸長方形	2.01×1.4	0.1	自然	RG1014より新
1015	O2-H12	隅丸方形	1.75×1.75	0.18	自然	RD1026、RX1001より新
1016	N2-T5	円形	0.9×1.1	0.7	人為	近世墓
1017	O2-H19	楕円形	2.84×1.8	0.28	人為	RD1043、1045より新
1018	O2-H15	不整方形	3.28×3.12	0.24	人為	RB1007内部施設の可能性
1026	O2-G12	楕円形	2.62×1.34	0.52	自然	RX1001より新、RD1015より古
1027	O2－H13	円形	2.35×1.8	0.3	自然	RB1013より古、炭化物含む
1030	O2－K25	円形	0.99×1.1	0.1	人為	土坑内礫集中
1031	O2－K23	円形	2.85×2.6	1.49	自然	RD1042、RG1004より新
1032	O2－K22	円形	2.0×2.1	0.3		RG1002より新、RD1003より古
1033	O2－K21	楕円形	1.52×0.9	—		RG1002、RB1004、RD1032より新
1034	O2－K20	楕円形	0.9×0.7	0.08		RG1002より新、RD1033より古
1035	O2－H21	円形	2.88×2.68	—		RD1051、RB1005より古
1036	O2－F22	不整形	2.9×1.5	—		RG1009より新、RB1019より古
1037	O2－H24	隅丸長方形	1.14×1.2	—		RG1009より新、RD1010より古
1042	O2－J22	不整円形	2.4×2.1	0.2		RD1044より新、RD1031より古
1042	O2－I17	円形	—	—		RE1007より古
1043	O2-G20	楕円形	1.3×1.02	0.66		RG1002より新、RD1017より古
1044	O2－J23	円形	1.32×1.32	0.63		RG1007より新、RD1837より古
1045	O2－H18	楕円形	1.08×1.95	0.22	人為	RG1002、RE1007より新、RD1017より古
1046	O2－H18	円形	0.93×0.9	0.18	人為	RD1047より新
1047	O2－H18	円形	0.8	0.3	人為	RD1045、1046より古
1049	O2－L14	不整形	1.02×0.7	0.15	人為	
1050	O2－J21	楕円形	2.2×1.87	—		RG1002より新、RB1004より古
1051	O2－H20	楕円形	2.05×1.35	0.6		RD1034より新
1052	O2－K16	円形	1.2×0.9	—		
1053	O2－M17	楕円形	1.2×0.8	—		
1054	O2－N17	円形	1.4×1.2	—		
1055	O2－M17	不整円形	0.95	0.78	人為	
1056	O2-J16	隅丸長方形	1.2×0.8	0.45	人為	RD1057より新
1057	O2-J16	円形	2.3×2.7	0.3	人為	RD1056より古
1058	O2-H14	楕円形	1.4×1.2	0.46	自然	RB1007より古
1059	O2－H12	円形	2.1×2.15	0.65	自然	RG1009より新、RB1005、RD1060より古
015	N2-V18	方形	1.8×2.1	0.9		
030	N2-V17	円形	1.1	0.6		
031	N2-W17	円形	1.1	0.55		
032	N2-Y22	楕円形	2.6×1.6	0.1		
033	O2-B24	円形	1.04	0.9		
034	O2－C25	円形	1.0	0.48		
035	N2-Y20	不整円形	2.4×2.1	—		
042	O3-D3	円形	0.9×1.0	0.52		RD043より古
043	O3-D2	円形	1.8×1.9	0.28		RD042より新
044	O3－E3	円形	1.2	—		
045	O3－D3	円形	1.4	—		
046	O3－F4	楕円形	2.7×1.6	—		
050	O3-G5	溝状	2.2×0.5	—		
501	N3-Q18	楕円形	1.75×0.9	1.06		RE2004を切る。陥し穴状。近世陶磁器出土。
502	N3-R19	楕円形	1.38×1.2	0.65		RE2004より古。
503	O3-B20	不整形	0.7×1.3	0.35	人為	
504	O3-C24	楕円形	1.9×0.75	—		RG2005より新。
505	O4-F2	楕円形	1.7×0.8	—		RD2031と重複
506	O4-E7	円形？	2.18	0.63		縄文時代晩期土坑。
507	04-E7	楕円形	1.6×0.85	0.08		
508	N4-Q1	楕円形	1.6×1.1	0.4		
509	N4-Q1	楕円形	2.9×0.9	0.1		
510	N3-P22	円形	1.0×1.1	0.58	自然	
511	N4-G4	円形？	1.55	0.74		
801	O3-D15	円形	3.1	0.56	自然	RD040(縄文)を切る
802	O3-D7	不整円形	1. 2×1. 3	0.25		RB1804に切られる、鉄器
803	O3-C9	円形	1.05	0.3		RB1801、1802に切られる
804	O3-B10	楕円形	2.1×1.7	0.55	人為？	
805	O3-A9	楕円形	1.15×0.57	0.15		RB1801に切られる
806	N3-X10	円形	2.15	0.45		
807	O3-A11	円形	0.9×1.2	0.2		
808	N3-X16	円形	1.0×1.2	0.3		
809	N3-X17	不整形？	—	0.3		近世陶磁器、鉄製品
810	N3-X16	円形？	—	0.4		
811	N3-V16	不整形	—	0.26		RA503(平安)の煙道を切る
501	N3-Q18	楕円形	1.75×0.9	1.06		RE2004を切る。陥し穴状。近世陶磁器出土。
502	N3-R19	楕円形	1.38×1.2	0.65		RE2004より古。
503	O3-B20	不整形	0.7×1.3	0.35	人為	
504	O3-C24	楕円形	1.9×0.75	—		RG2005より新。

旧番号	グリッド	平面形	長軸×短軸(m)	深さ(m)	埋　土	備　考
505	O4-F2	楕円形	1.7×0.8	—		RD2031と重複
506	O4-E7	円形？	2.18	0.63		縄文時代晩期か？
507	04-E7	楕円形	1.6×0.85	0.08		
508	N4-Q1	楕円形	1.6×1.1	0.4		
509	N4-Q1	楕円形	2.9×0.9	0.1		
510	N3-P22	円形	1.0×1.1	0.58	自然	
511	N4-G4	円形？	1.55	0.74		
1004	N3-O13	楕円形	1.5×1.1	—		
1005	N3-N14	円形	1.2	—		
1006	N3-O14	円形	1.3	—		
2006	N3-U19	不整円形	1.4×1.3	—		RD2050と重複
2007	N3-V19	楕円形	2.3×2.1	—		RD2050と重複
2008	N3-T19	隅丸方形	1.75×1.35	—		
2009	N3-S20	隅丸長方形	2.25×1.2	—		
2010	N3-U21	—	—	—		
2011	N3-R18	不整楕円形	1.55×0.7	—		RE2004より新
2012	N3-R22	円形	0.6×0.48	—		RD2080と重複
2013	—	—	0.72	0.25	人為	炭化物多い
2014	O3-E23	楕円形	1.95×1.1	—		RB2810と重複
2016	O3-F24	隅丸長方形	2.1×1.3	—		
2018	O4-A5	不整円形	4.9×4.4	—		RE2010より新
2019	O4-A4	円形	1.2	—		RI2020に切られる
2020	O4-A3	楕円形	2.6×1.95	1.1以上		石組井戸。RD2021より新
2021	O4-B2	不整形	1.7×0.9	—		RI2020と重複
2022	N4-X4	楕円形	3.2×2.6	—		RD2084RG2009と重複
2023	—	—	1.4	0.4	人為	近世
2024	N4-X5	不整長方形	2.3×1.8	—		RE2008と重複
2025	—	—	—	—		
2026	—	—	—	—		
2027	O4-C2	円形	1.5	0.2	人為	
2028	—	—	2.6	0.15		
2029	N4-S7	円形	3.15×3.4	1.3以上		石組井戸
2030	—	—	—	20	人為	近世。柱抜取り穴？
2031	O4－F3	円形	1.3×1.3	—		
2033	N4-G2	隅丸方形	2.6×1.6以上	—		
2034	O4-B7	楕円形	0.9×0.65	—		RD2036と重複
2035	O4-D3	円形	1.05	—		RI2017より古
2036	O4-A7	不整形	0.7×0.56	—		
2037	O2-C19	円形	0.93	0.3	人為	RX2001より新
2038	O2-D20	方形？	0.84	0.3	人為	RX2001より古
2040	—	—	—	0.35		
2041	N3-L24	—	—	0.28		
2043	N4-W2	長方形	2.2×1.5	0.42	自然	石組壁
2045	O3-F22	円形	0.9×0.9	—		池と重複
2046	O3-F20	円形？	0.8	0.12		
2047	—	—	—	—		
2048	N4-J5	円形	—	—		近世墓。RG2007より古
2049	—	—	—	—		
2050	N3-U19	円形	2.6×2.2	0.2		RD2051、2007より古
2051	N3-V20	方形	1.68×1.78	0.78	人為	RD2050より新
2052	N3-Y19	隅丸方形	1.7×1.7	0.48		石組壁、RD2063より新
2053	N3-S15	？	0.8	0.2		
2054	N3-S14	円形	1.1	0.28		
2055	O3-B23	楕円形	1.65×1.3	0.24	人為	RB2810と重複
2056	O2-B23	円形	1.2×1.15	0.3		RB2810と重複、RG2009より新
2057	O3-D25	不整形	0.9×0.45	0.43		RD2071より新
2058	O3-D24	円形	0.62	0.34		RD2071より新
2059	O3-C24	不整形	1.0×0.8	0.26		RD2071より新
2060	O3-F24	円形	1.55×1.4	0.4		RD2016と重複
2061	N3-V24	—	1.2	0.3		
2062	—	—	—	—	—	
2063	N3-W19	隅丸長方形	3.7×2.7以上	—		RD2052と重複
2064	N4-S5	円形	1.12	0.23	人為	
2065	N4-W4	円形	1.6	0.3		RD2084より新
2066	—	—	1.1	0.32		
2067	N3-Y19	楕円形	1.6×1.3	—		
2068	N3-V20	—	1.5	0.1		
2069	N3-Q24	—	1.9	0.3	人為	
2070	N3-Q24	—	—	0.35	人為	
2071	O3-C24	長楕円形	3.5×0.8	—		RD2059より新、RB2810より新
2072	O4-C2	不整形	0.9×0.8	0.22		
2073	O3-E24	円形	0.94×1.95	0.36	人為	
2074	—	—	—	—	—	
2075	—	—	—	—	—	
2076	N3-W23	楕円形	1.45×1.7	0.23	人為	
2077	O4-C1	長楕円形	3.2×0.8	0.3		焼土、炭化物多い
2079	N3-R20	円形	1.1×0.95	0.28		
2080	N3-R21	楕円形	2.2×1.7	—		
2081	N3-P21	円形	0.8	0.15		RB　より新
2082	O3-P16	—	—	—	—	

旧番号	グリッド	平面形	長軸×短軸(m)	深さ(m)	埋 土	備 考
2083	O3-P16	—	—	—	—	
2084	N4-W4	不整形	3.2×2.9	0.3		RD2022、RD2091と重複
2085	O3-I21	円形？	1.6	0.52	人為	
2086	N3-P15	円形	1.4×1.8	0.28	人為	RD2090より新
2090	N3-P16	円形	0.98	0.8	人為	近世墓。RD2086より古
2091	O4-E4	円形	1.5×1.4	—		RI2017より古
2093	O4－E5	不整形	2.3×0.9	0.2		RD2091と重複
2095	O4-C9	長方形	2,3×1.6	—		RG2002環壕、RD2096土坑と重複
2096	O4-C9	円形	1.5	—		RD2095と重複
2097	N4-W1	長方形	2.1×1.0	0.22	人為	
2098	O4-E6	楕円形	1.4×0.7	0.17		
2000	N4-K3	円形	1.1	0.6	人為	近世墓。RG2007より古
2100	O4-V9	円形	0.9×0.8	0.2		
2101	N3-Q21	—	0.74	0.14		
2102	N3-R20	—	0.51×0.8	0.26	人為	
2103	—	—	—	—		
2104	N3-S20	楕円形	0.7×0.4	0.44		
2105	N4-W2	不整形	1.7×1.2	—		RD2106より古
2106	N3-V25	不整形	1.7×1.4	—		RD2107より古
2107	N3-V25	楕円形	2.1×1.48	—		RD2106より新
2109	O4-D3	円形	0.9×0.8	0.18	人為	RD2035より古
2111	N4-T2	円形	1.24	0.4		RE2009より新
2112	O3-F25	円形	1.1	0.28		RD1016と重複
2115	N4-S4	楕円形	1.3×0.8	0.1		
2116	N4-S3	円形	0.9×1.0	0.42		RE2011より新
2117	N4-X6	円形	0.65×0.55	0.1		RG2100大溝より新。
2118	—	—	—	0.16		
2119	N4-O3	—	1.8×1.7	0.2		
2120	O4-D9	円形？	1.2	0.2		
2501	O3-H11	円形	2.2×2.0	—		
2502	O3-F11	楕円形	1.2×0.9	—		
2503	O3-E6	円形	1.2×1.2	—		
2504	O3-G7	楕円形	2.4×2.4	—		RG2100より古
2505	O3-H7	楕円形	1.7×2.2	—		RG2100より古
2506	O3-J4	円形	1.5	—		RD2506より古
2507	O3－J4	円形	1.2	—		
2511	O3-F7	円形	1.2	—		
2512	O3-D1	—	—	—		
2513	O3-H12	円形	1.2	—		
2514	O3－J8	楕円形	1.6×1.2	—		
2519	O3-D13	楕円形	2.7×1.3	—		
2521	O3-C15	円形	0.9	—		
2523	O3-A15	楕円形	2.7×1.7	—		
2528	O3-E13	楕円形		—		
2529	O3-G13	円形	1.4×1.3	—		
2530	O3-F14	楕円形	1.2×0.8	—		
2531	O3-E15	楕円形	1.8×1.2	—		
2532	O3-G15	不整長方形	1.7×0.9	—		
2539	O3-D16	楕円形	1.7×0.9	—		
2551	O3－Q23	不整楕円形	5.1×4.1	—		
2552	O3－N24	円形	1.2	—		
2556	O3－O25	不整楕円形	4.3×3.6	—		

3　出土遺物

土　　器

第17図1～5は、西側に隣接する柿ノ木平遺跡の東端部、RD0502土坑から一括して出土した土器類である。いずれも酸化焔焼成で5のみ内外黒色処理されている。1～3は小皿である。底部は回転糸切で無調整。1と2は底部下端が幾分張り出し、体部の中ほどで折れて立ち上がる特徴をもつ。4は高台の付く厚手の坏底部。5は回転糸切後、底部外周にわずかな高台を貼り付けているもので、内外丁寧にヘラミガキされ、黒色処理されている。これらの土器は10世紀後葉から11世紀前葉あたりの年代か。

第17図6～14は、手捏かわらけの一群である。このうち11は堰根遺跡出土のものを参考資料として掲載した。6～11は口径11.7cm～14.0cm、器高2.4cm～3.1cmのグループで、体部から底部にかけて指圧調整またはヘラ削りのあと口縁部を横ナデ調整する。12と13は口径11.4cm、器高3.2cmのもので、体部は指圧またはヘラ削りのあと、全体を軽くナデている。14は口径9cm、器高1.8cmの小型かわらけで、底部はへら削りで平底に近く、口唇部に灯心痕が認められる。15は口径8cm、器高2.2cmの小型かわらけで、底部は糸切りかヘラ切りか明確でない。16～18は底部糸切りで体部から口縁部にかけて丸く内湾する器形の一群である。17と18は厚手に作られ、18の体部内面には掻目のような調整がある。19～21は、本遺跡西側の柿ノ木平遺跡北側段丘崖の表土から出土したかわらけである。回転ヘラ切り後、体部下半から底部外面をロクロ回転しながらケズリとミガキをかけている。盛岡城跡腰曲輪に出土例があり、18世紀～19世紀の製品である。

22と23は須恵器系陶器の壷の底部である。糸切底で底部外面をヘラ削りしている。

24から28は常滑の製品である。24、25は常滑三筋文壷の肩部の破片である。26は大甕の底部。

27は外面にタタキのある大甕体部破片である。22～27は12世紀を中心とする年代である。

28は常滑の大甕で底部を欠く。輪積み痕が顕著であるが、体部下半はヘラ削りされている。17世紀の製品である。

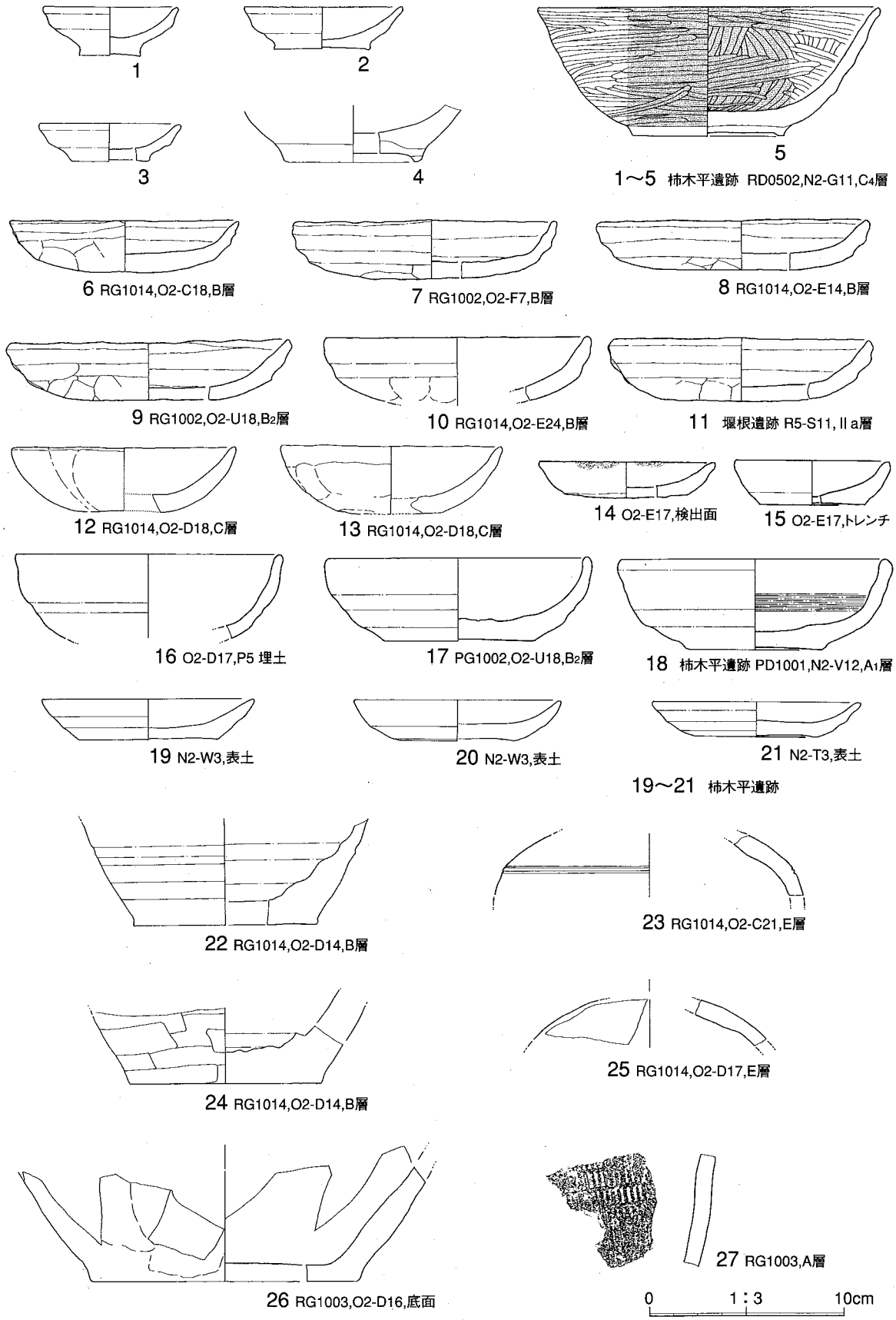
29と30は信楽の壷または甕の底部である。16世紀～17世紀の製品である。

31は京焼の平椀で内面に緑色と藍色で竹林文を画く。18世紀後半ごろの製品である。32は国産の擂鉢底部である。18世紀ごろか。

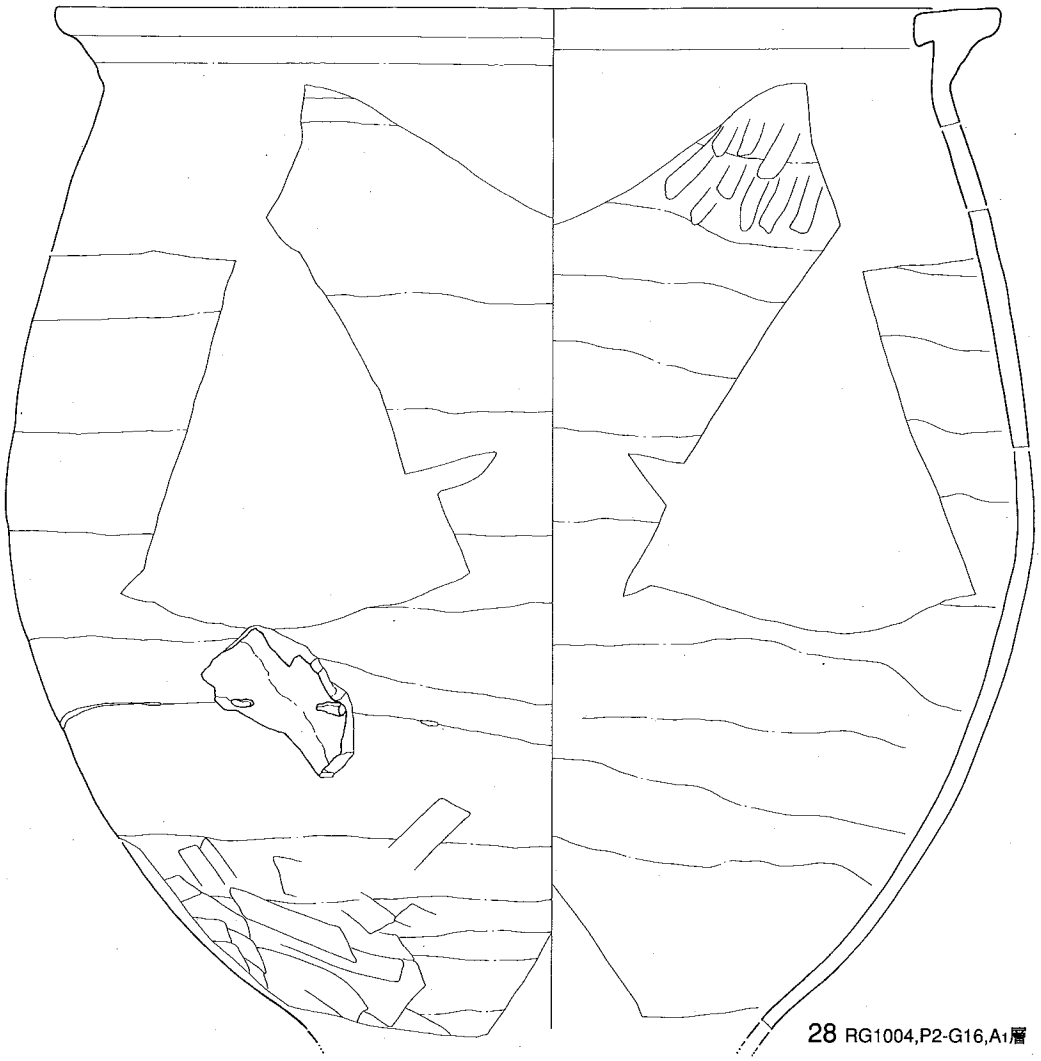
33～45は瀬戸・美濃の製品である。33～36は灰釉丸皿で、33は大窯Ⅰ期、34、35、36は大窯Ⅱ期からⅢ期のものである。37、38は灰釉折縁皿で大窯Ⅳ期のものである。39と40は鉄釉天目茶碗で、39は窖窯期の製品、40は16世紀後半の大窯Ⅲ期～Ⅳ期の製品である。41は志野の鉄絵角皿で16世紀末～17世紀前葉の製品。42は志野の鉄絵丸皿で17世紀の製品である。43は志野の丸皿で17世紀。44は灰釉輪禿皿で17世紀後半ごろ、45は灰釉の小壷の口である。

46～58は唐津の灰釉皿で、16世紀末から17世紀前葉の製品である。このうち53～58は鉄絵、48、51、53、54、58は胎土目痕がある。また、第7図版ｉは北側段丘崖下の旧河道より出土した唐津大鉢である。

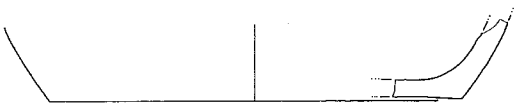
59～62は初期伊万里の皿で、59は蟠蛟文の輪花皿、61は大ぶりの皿である。63、64は17世紀代の肥前染付の皿と碗、65、66は肥前のくらわんか手の碗で65はコンニャク印判である。67と68は口紅のある皿で68は盛岡城下の花古窯のもの、69は国産染付の猪口である。



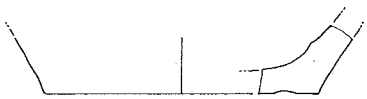
第17図　土器・須恵器系・常滑



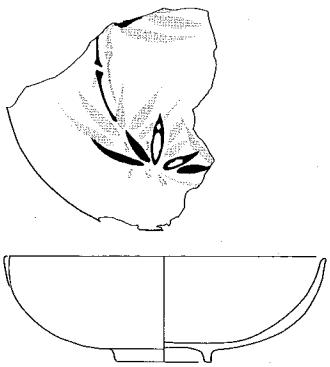
28 RG1004,P2-G16,A1層



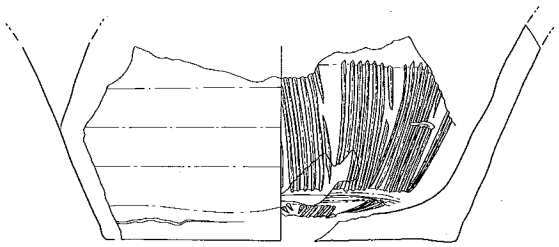
29 南半部



30 北半部



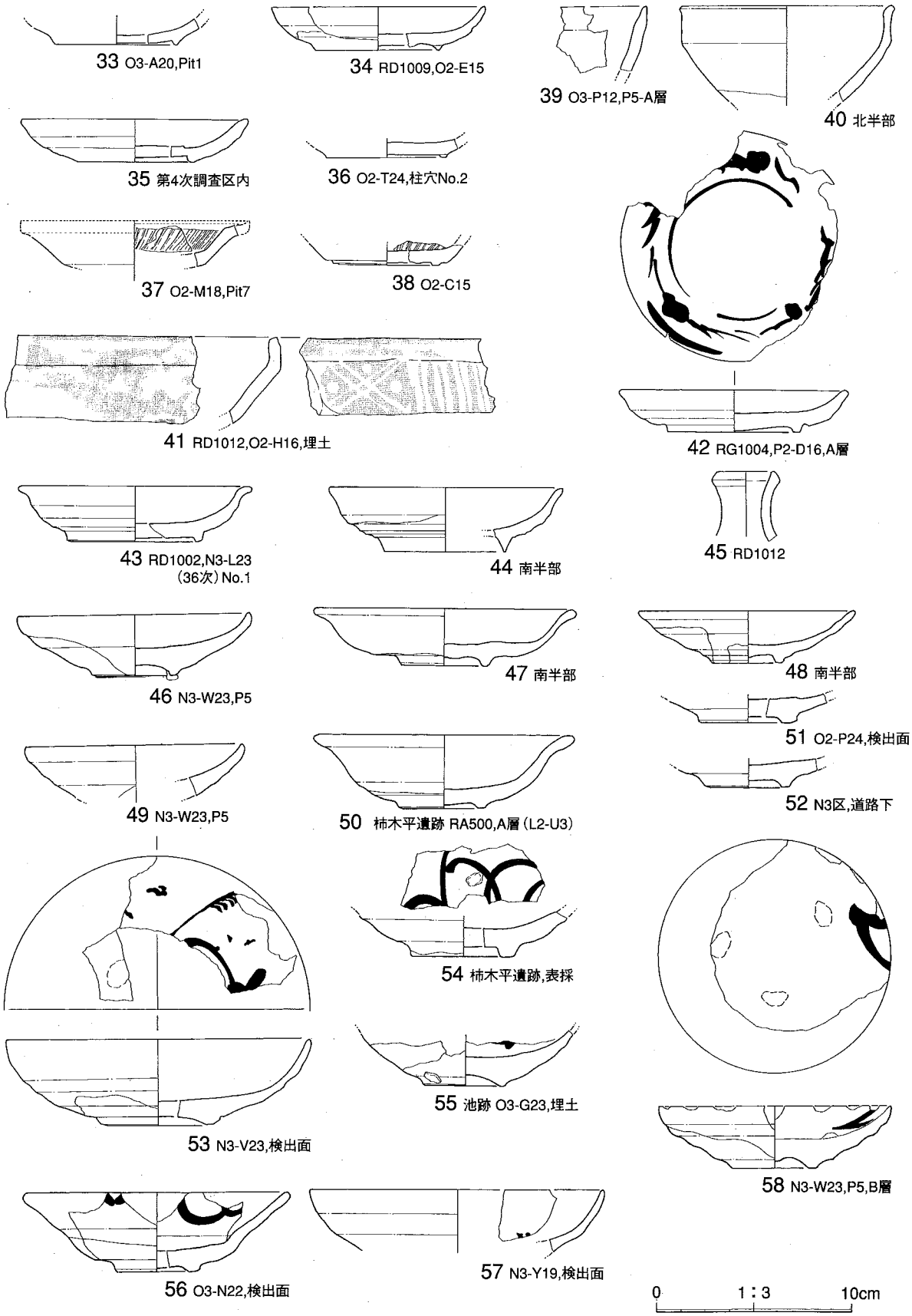
31 O3-C16,P3 埋土



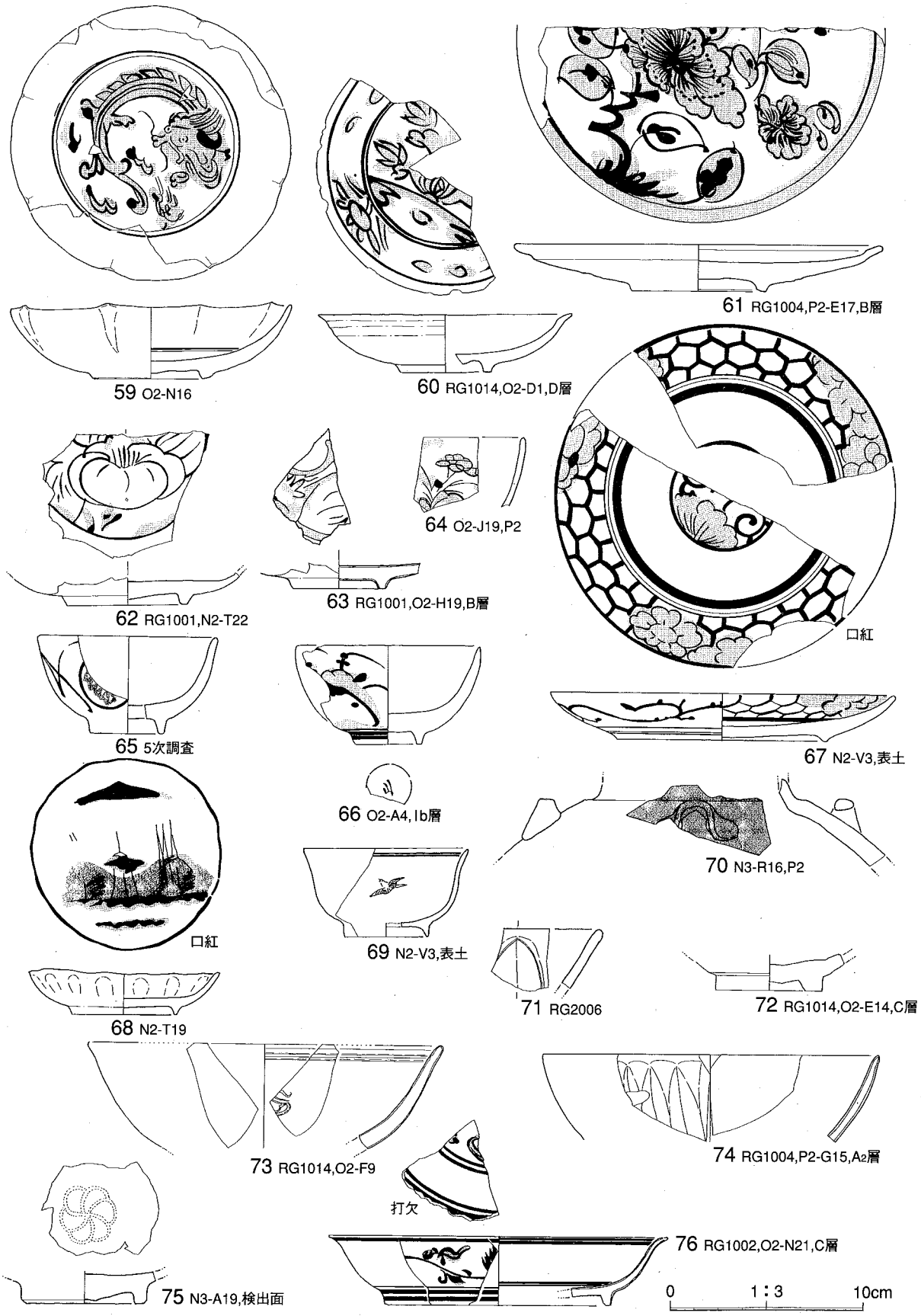
32 RG1004,O2-Y18,A層

0　1：3　10cm

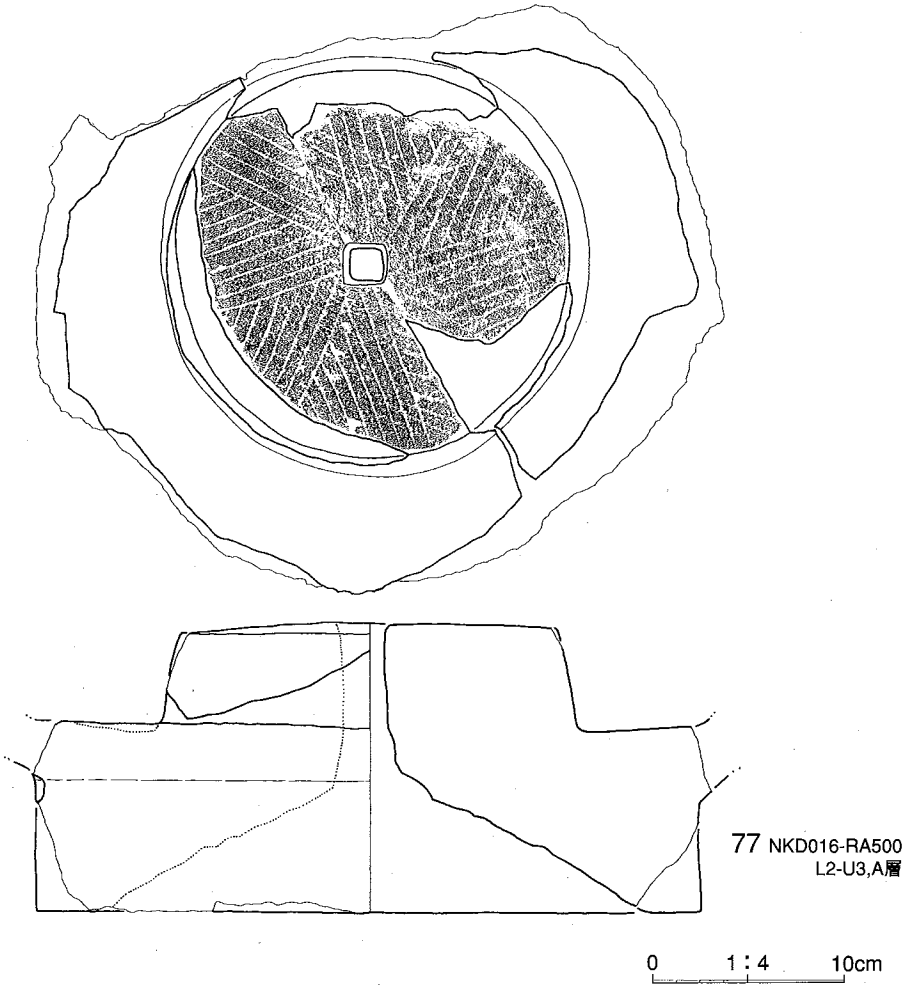
第18図　常滑・信楽・京焼 他


33 O3-A20,Pit1
34 RD1009,O2-E15
39 O3-P12,P5-A層
40 北半部
35 第4次調査区内
36 O2-T24,柱穴No.2
37 O2-M18,Pit7
38 O2-C15
41 RD1012,O2-H16,埋土
42 RG1004,P2-D16,A層
43 RD1002,N3-L23
(36次) No.1
44 南半部
45 RD1012
46 N3-W23,P5
47 南半部
48 南半部
51 O2-P24,検出面
49 N3-W23,P5
50 柿木平遺跡 RA500,A層(L2-U3)
52 N3区,道路下
54 柿木平遺跡,表採
55 池跡 O3-G23,埋土
53 N3-V23,検出面
58 N3-W23,P5,B層
56 O3-N22,検出面
57 N3-Y19,検出面
0
1:3
10cm

第19図　瀬戸・美濃、唐津



第20図　国産染付・中国陶磁器



第21図　石臼

70～76は中国陶磁器である。70は黄釉褐彩四耳壺、71は鎬蓮弁文の青磁碗、72は白磁碗の底部。73は刻画文のある青磁碗。74は蓮弁文の竜泉窯系青磁碗。75は被熱しているが見込みに印花文のある青磁碗である。76は中国染付の皿で、口唇部を打ち欠いている。

77は50の唐津皿とともに出土した安山岩製の茶臼の下臼である。中心に四角い孔が穿たれている。

このほか銭貨として永楽通寶、洪武通寶、無文銭、寛永通寶なども相当量出土しているが、火災により現存しない。鉄製の刀子や釘類も同様である。

土器一覧表

調査次	北半部 挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
3次	18		RD1001	RD1001, N2-V12	A1	1	土器	かわらけ	口～底	14.2	7.0	4.6	中近世	
			RD1017	RD1017, O2-H19	埋土	12	土器	かわらけ	口～体					
			RD1029	RD1029, O2-A6	埋土	20	土器	かわらけ	体					
			RD1039	RD1039, O3-F1	埋土	22	土器	かわらけ	口～体					
			RE1004	RE1004, N2-X7	埋土	33	土器	かわらけ	口～体					
			RE1006	RE1006,	A4	36	土器	かわらけ	口～体					
			RE1006	RE1006, O2-J12	埋土	37	土器	かわらけ	体					
			RE1008	RE1008,	埋土	38	土器	かわらけ	体～底					摩滅
			RG1001	SD001, N2-Y13	D	64	土器	かわらけ	体					
			RG1001	SD001, N2-W13	C	66	土器	かわらけ	口					
			RG1001	SD001, N2-X12	C	68	土器	かわらけ	体～底					2点
			RG1001	SD001, N2-X13	C	70	土器	かわらけ	体					2点
			RG1001	SD001, N2-U18	B	72	土器	かわらけ	体					
			RG1001	SD001, N2-X12	B	75	土器	かわらけ	口～体					2点
			RG1001	SD001, N2-X13	B	80	土器	かわらけ	口					
			RG1001	SD001, N2-Y14	B	83	土器	かわらけ	体					
			RG1001	SD001, N2-T20	埋土	85	土器	かわらけ	口～体					3点
			RG1004	RG101, P2-G15	A1	45	土器	かわらけ	口～体					2点
			RG1004	RG101, P2-G16	A1	46	土器	かわらけ	口～底					2点
			RG1014	RD1009, O2-F14	A	9	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-D10	G	89	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-E10	D	93	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-F10	D	95	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-C12	C	97	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-A12	B	99	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-C13	B	104	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD001, O2-B11	埋土	140	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD001, O2-C11	埋土	144	土器	かわらけ	口～底					2点、底部糸切
			RG1014	SD001, O2-E11	埋土	148	土器	かわらけ	口					
			RG1002	SD001, O2-G9	埋土	150	土器	かわらけ	口～体					
			RG1002	SD002, O2-G19	埋土	158	土器	かわらけ	体					
			RG1002	SD002, O2-J20	埋土	160	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD003, O2-C13	G	169	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD003, O2-D12	D	172	土器	かわらけ	体～底					3点, 底部糸切
			RG1014	SD003, O2-E14	C	177	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD003, O2-C12	B	180	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD003, O2-D12	B	181	土器	かわらけ	体					2点
			RG1014	SD003, O2-D13	B	185	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD003, O2-D14	B	188	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD003, O2-E13	B	195	土器	かわらけ						
	8		RG1014	SD003, O2-E14	B	197	土器	かわらけ	口～底	142		25	12C	手捏ね
	10		RG1014	SD003. O2-E24	B	197	土器	かわらけ	口～体	133		36	12C	手捏ね
			RG1014	SD003, O2-F13	B	204	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD003, O2-D13	A	208	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	SD003, O2-E14	A	210	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD003, O2-D15	埋土	213	土器	かわらけ	体					
			RG1014	SD003, O2-G9	埋土	216	土器	かわらけ	体～底					2点, 底部糸切
			RG1004	SD004, O2-I23	埋土	217	土器	かわらけ	底					
			RG1006	SD006, O3-F1	埋土	220	土器	かわらけ	体～底					
			RG1014	O2-D11	C～D	242	土器	かわらけ	口～体					2点
			RG1014	O2-E11	C～D	247	土器	かわらけ	体					
			RG1014	O2-B15	B	249	土器	かわらけ	口～体					
			RG1014	O2-D11	B	253	土器	かわらけ	口					
			RG1014	O2-C11	A	261	土器	かわらけ	体					
			RG1014	O2-D12	A	266	土器	かわらけ	口・底				12C	5点　手捏ね
			RG1014	O2-E12	A	268	土器	かわらけ	口					
			旧河道	O2-S3	Ⅰb	269	土器	かわらけ	体					
			包含層	N2-T3	Ⅰb	272	土器	かわらけ	体					2点、段丘崖
			包含層	N2-U3	Ⅰb	275	土器	かわらけ	体					段丘崖
			包含層	N2-Y3	Ⅰb	277	土器	かわらけ	口					段丘崖
			包含層	O2-A4	Ⅰb	284	土器	かわらけ	底					段丘崖
						287	土器	かわらけ						
						292	土器	かわらけ						
						297	土器	かわらけ						
						305	土器	かわらけ						
						307	土器	かわらけ						
						308	土器	かわらけ						
						309	土器	かわらけ						
						315	土器	かわらけ						
5次	7		RG1002	SD002, O2-F7	B	15	土器	かわらけ	口～体	13.7		31	12C	手捏ね
			RG1002	SD002, O2-C23	D	18	土器	かわらけ	口～体				12C	手捏ね
			RG1011	SD011, N2-W1	埋土	29	土器	かわらけ	体					
			RG1011	SD011, N2-X17	埋土	32	土器	かわらけ	口～体					
			RG1011	SD011, O2-A17	埋土	39	土器	かわらけ	体～底				12C	手捏ね
			RG1014	SD013, O2-C17	D	43	土器	かわらけ	体～底					
			RG1014	SD013, O2-C17	C	50	土器	かわらけ	口～体				12C	手捏ね
	6		RG1014	SD013, O2-C18	B	55	土器	かわらけ	口～体	11.8		2.7	12C	手捏ね
				N2-P24 P1	埋土	117	土器	かわらけ	体					
	16			O2-D17 P5	埋土	120	土器	かわらけ	口～体	13.8		(4. 3)	15～16C	ロクロ　糸切
				O2-D17	検出面	135	土器	かわらけ	口					
	14			O2-E17	検出面	138	土器	かわらけ	口～底	9.2		1.9	12C	手捏ね
				N3-F1	検出面	150	土器	かわらけ	体				12C	手捏ね
				N3-U2	検出面	154	土器	かわらけ	体				12C	手捏ね
	15			O2-F17	表土	161	土器	かわらけ	口～底	8.1		2.3	12C	底部糸切
				N2-V24	撹乱	163	土器	かわらけ	体					
			RG1015	SD016, O2-E23	埋土	173	土器	かわらけ	体					
	12		RG1014	SD014, O2-D18	C	179	土器	かわらけ	体～底	11.6		3.3	12C	手捏ね
	13		RG1014	SD014, O2-D18	C	183	土器	かわらけ	口～底	11.5		3.5	12C	手捏ね

調査次	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
北半部														
6次			RG1002	SD02, O2-Q20	埋土	31	土器	かわらけ	体～底					
				O2-P15		45	土器	かわらけ	体～底					
				O3-F12, P2	埋土	46	土器	かわらけ	体					
				O2-V20	検出面	56	土器	かわらけ	口～底				近世	
7次	17		RG1002	SD002, O2-U18	B2	15	土器	かわらけ	口～底	13.7	7.8	4.3	中近世	
			RG1002	SD002, O2-U18	B2	16	土器	かわらけ	口～体	14.8		3		
			RG1004	SD003, P2-C18	B	28	土器	かわらけ	体～底					
			RG1004	SD003, P2-A18	A	33	土器	かわらけ	体					
			RG1004	SD003, P2-E18	A	37	土器	かわらけ	口～体					
				O2-W13	Ⅱb	44	土器	かわらけ	底					
				段丘下, O2-W13	Ⅱ	48	土器	かわらけ	体～底					
				段丘下, O2-W13	Ⅰ	55	土器	かわらけ	口					
				O2-V18	撹乱	63	土器	かわらけ	体					
南半部														
調査次	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
4次			RD2050	RD2050, N3-V20	埋土	31	土器	かわらけ	体					
			RD2095	RD2095, O4-C9	A	37	土器	かわらけ	体					
			RG2100	RD2100, O4-B7	B	64	土器	かわらけ	口～体					
			P2	N4-N6, P2	埋土	98	土器	かわらけ	体～底					
				O3-B21		131	土器	かわらけ	体～底			2.5	近世？	
			RD2016	RD2016	埋土上	161	土器	かわらけ	体～底				近世	
			RD2064	RD2064, N4-S5	埋土	162	土器	かわらけ	口～底				近世	
6次			RG2100	SD2100, O3-J10	埋土	41	土器	かわらけ	体					
				O3-F12, P2	埋土	45	土器	かわらけ	体					
				O3-H8	検出面	67	土器	かわらけ	体～底				近世	
				O3	撹乱	92	土器	かわらけ	体					

陶磁器一覧表

(数字)は近似値

調査次	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
北半部														
3次	34		RD1009	RD1009, O2-E15	Ⅲ	1	陶器	灰釉丸皿		110	65	22	16C	瀬戸・美濃、遺構年代は近世
			RD1056	RD1056, O2-J16	—	2	磁器	碗						国産
			RD1060	RD1060, O2-I23	埋土上部	3	陶器	灰釉皿					16C～17C	唐津
			RD1012	RD1012		5								底部破片
			RG1001	SD1001 N2-X13	B	8	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
	61		RG1001	RG1100 N2-T22	埋土	18	磁器	皿	底		63		17C初	初期伊万里
		g	RG1002	SD1002 O2-H19	検出面	11	陶器	皿	底		49		16C	瀬戸・美濃
	62		RG1002	SD1001 O2-H19	埋土	2	磁器	皿					17C前葉	初期伊万里(RD1071か？)
	75		RG1002	SD② O2-N21	C	20	磁器	皿	口～底	176	119	35	15C～16C	中国産染付
			RG1014	SD1001 O2-G13	埋土	1	陶器	碗					16C末～17C初	唐津
	24		RG1014	SD1001 O2-D14	B	4	陶器	壺			99		12C～13C	須恵器系, 底部糸切
			RG1014	SD1001 O2-D14	A	5	陶器	皿					12C～13C	須恵器系, 底部糸切
	22		RG1014	SD1003, O2-D14	B	3	陶器	壺			95		12C～13C	須恵器系, 底部糸切
			RG1014	SD1003, O2-D16	底面	6	陶器	甕	底		138		12C～13C	常滑
		b	RG1014	SD1001, O2-E10	D	9	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
			RG1014	SD1001, 北法面	表土	10	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
	71		RG1014	O2-E14,	C	21	磁器	碗	底		56		12C	中国白磁
	72		RG1014	SD① O2-F9	C	19	磁器	碗	口～体	(185)			12C	中国青磁
	63			O2-J19 P2	埋土	1	磁器	碗	体				17C前半	肥前
	37			O2-M18 P7	埋土	2	陶器	碗	体	(118)			16C	瀬戸・美濃
				O2-M19 P1	—	3	磁器	皿						国産染付
				O2－L15 P12	埋土	5		碗						
	58			O2-L17 P2	埋土	6	磁器	輪花皿	完	141	62	39	17C初	初期伊万里
			遺構外	N2－W3	Ⅰb	1	磁器	皿	口～体				19C	花古
				N2－Y4	Ⅰb	2	陶器	皿	体～底					肥前
				N2－V3	表土	3	磁器	鉢	口～底					国産染付
	68			N2－V3	表土	4	磁器	碗	口～底	86	44	46	19C	国産染付
				N2－V3	表土	5	陶器	鉢	体～底					国産染付
				N2－V3	表土	6	磁器	徳利	体					国産染付
	66			N2－V3	表土	7	磁器	皿	口～底	177	111	24		肥前染付、口紅
	65			O2－A4	Ⅰb	8	磁器	碗	口～底	96	35	51	18C	国産染付
				O2－A4	Ⅰb	9	磁器	碗	口～体				18C	肥前染付 コンニャク印判
				O2－B5	表土	10	磁器	皿	口～体				18C～19C	国産染付 口紅
	38			O2－C15	撹乱	11	陶器	皿	体～底		55		16C～17C	瀬戸・美濃灰釉
				—	—	12	磁器	碗	口～体				15C～16C	中国青磁 現説建物⑦柱穴
	40			—	—	13	陶器	茶碗	口～体	111			16C～17C	瀬戸・美濃天目
	30			—	—	14	陶器	壺	体～底		110		17C	信楽
	45			RD1012. O2-G17	埋土	15	陶器	瓶子？	口～頸	35			17C～18C	瀬戸・美濃灰釉
				—	表面採集	16	磁器	碗	口～体				15C～16C	中国青磁
	67			N2-T23	—	23	磁器	皿	完	99	54	22	19C	国産染付、口紅
4		i	旧河道	O2-H1	埋土	34	陶器	鉢	底		125		17C～18C	唐津
5次			RG1001	RG1100. N2-U25	埋土	13	陶器							志野
			RG1003	SD15,	C	8	陶器	甕					12C～13C	常滑
			RG1003	SD15, O2-E21	B	9	陶器	甕					12C～13C	常滑
			RG1003	SD16, O2-B23	底面	10	陶器	甕					12C～13C	常滑
			RG1003	SD16, O2-E23	B	11	磁器	皿					12C～13C	中国白磁
			RG1014	SD14, O2-C21	E	1	陶器	壺	体				12C～13C	常滑
			RG1014	SD14, O2-D16	E	2	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
	25		RG1014	SD14, O2-D17	E	3	陶器	甕					12C～13C	常滑
			RG1014	SD14, O2-C20	D	4	陶器	甕					12C～13C	常滑
	59		RG1014	SD14, O2-D1	D	5	磁器	皿	口～底	132	48	29	17C	初期伊万里
			RG1014	SD14, O2-D18	C	6	陶器	甕					12C～13C	常滑
		a	RG1014	SD14, O2-D17	A	7	陶器	甕					12C～13C	常滑
			遺構外	O2-C25	検出面	1	磁器	皿	体～底				17C	初期伊万里

	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
5次				O2-E24	検出面	2	陶器	壺	体				17C	信楽
				O2-F19	検出面	3	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
				N3-O2	Ⅱ	6	磁器	皿	体					肥前
				—	表土	8	陶器	?						
				旧道路下	撹乱	10	磁器	皿	体～底				18C	肥前
				旧道路下	撹乱	11	陶器	焼台					江戸～明治?	
				旧道路下	撹乱	12	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
				旧道路下	撹乱	13	陶器	皿	体～底				16C～17C	唐津
				旧道路下	撹乱	14	磁器	碗	口				19C	花古4点
				旧道路下	撹乱	15	磁器	碗	口～体				19C	花古
				旧道路下	撹乱	16	磁器	碗	口				19C	花古
				—	盛土	19	磁器						18C	肥前
			RG1001	RG1100, N2-U25		21	陶器							志野
6次			RD2551	RD2551, O2-P22	B	2			底				近世?	見込の花弁の中に卍文
			RD2551	RD2551, O2-P22	B	3	磁器	皿	体				12C～13C	中国青磁
				O2－R25, Pit9	埋土	1	磁器	茶碗	口				18C	肥前, コンニャク印判五弁花文
	51			O2－P24	検出面	1	陶器	皿	底		51		16C末～17C初	唐津, 胎土目
				O2－R7	検出面	2	磁器	大皿	底		75		18C	肥前 蛇の目釉ハギ
				O2－R17	検出面	3	磁器	皿	底		53		近世	
				O2－T22	撹乱	10	磁器	皿	底				17C	肥前染付皿
				O2－W20	撹乱	11	陶器	皿	口				16C末～17C初	唐津鉄絵皿
	32		RG1004	RG1001, O2-Y18	A	1	陶器	擂鉢	底部		140		17C～18C	備前?
	42		RG1004	RG1001, P2-D16	A	2	陶器	皿	口～体	118	69	22	17C前半	志野鉄絵
7次			RG1004	RG101. P2－F16	A2	1	陶器	碗	体～底					肥前京焼風
			RG1004	RG101. P2－G15	A2	2	陶器	碗	口～底					肥前京焼風
			RG1004	RG101. P2－G16	A1	3	陶器		体～底					岩手焼(近代)
			RG1004	RG101. P2-G15	A1	4	陶器	碗	体～底					肥前京焼風
			RG1004	RG101. P2－G15	A1	5	磁器	碗						花古
			RG1004	RG101, —	表土	6	磁器	皿	口～底					初期伊万里
			RG1004	RG101, —	表土	7	磁器	皿	口～底					国産染付, 口紅
			RG1004	RG101, —	表土	8	磁器	鉢	口～底					国産染付
			RG1004	RG101, —	表土	9	陶器	蓋	口～底					国産染付
			RG1004	RG101, —	表土	10	磁器	皿	口～底					国産染付
			RG1004	RG101. —	表土	11	磁器	碗	口～底					国産染付
			RG1004	RG101. —	表土	12	磁器	茶碗	口～体					国産染付
			RG1004	RG101. —	表土	13	磁器	土瓶	体					
			RG1004	RG101. —	表土	14	磁器	皿	体～底					
	28		RG1004	RG101. P2-G16	A1	15	陶器	大甕	口～体	501		(533)	17C	常滑
				RG1100. N2-U25	埋土	16	陶器							志野
	60		RG1015	SD003. P2-E17	B	77	磁器	皿	口～底	192	71	25	17C初	初期伊万里

南半部

	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
4次			RD501	RD501. H3-Q8	C	1	磁器	碗	体～底				19C	山陰
			RD501	RD501. H3-Q8	C	2	磁器	皿	体～底				19C	国産染付
	43		RD1002	RD1002. N3-L3	埋土	1	陶器	皿	口～底	121	70	28	17C	志野 NKD036次調査
			RD2008	RD2008.	A1	3	磁器	皿	体～底				17C～18C	国産青磁
			RD2016	RD2016, O3-G25	A1	4	陶器	壺	体				12C～13C	中国褐釉四耳壺
			RD2016	RD2016, O3-G25	A	5	陶器	皿	体				16C～17C	唐津
			RD2016	RD2016	埋土上部	6	磁器	皿	体～底					国産染付
			RD2016	RD2016	埋土上部	7	陶器	皿	体～底				16C～17C	唐津
			RD2018	RD2018	埋土	8	陶器	壺					12C～13C	中国褐釉
			RD2020	RD2020	埋土上部	9	陶器	擂鉢	体				17C～18C	2点
			RD2043	RD2043, N3－W12	A1	10	陶器	皿	口～底					国産染付
		f	RD2049	RD2049, N4－M2	A5～A9	11	陶器	大甕	体				12C	常滑
			RD2049	RD2049, N4－L2	埋土	12	陶器	皿	体				16C～17C	唐津
		d	RD2049	RD2049, N4－L2	埋土	13	陶器	甕	体				12C～13C	常滑
		e	RD2049	RD2049, N4－L2	埋土	14	陶器	壺	体					常滑
			RD2049	RD2049, N4－M2	埋土	15	磁器	皿	体～底					国産青磁
			RD2051	RD2051, N3-V20	埋土	16	磁器	仏飯器	口～底				18C	肥前染付 コンニャク印判
			RD2052	RD2052, N3-X18	埋土	17	磁器	輪花皿	完					染付
	49			N3－W23. P5	B	1	陶器	皿	口～体	106				唐津
				N3-X22. P8	埋土	2	陶器	皿	口				16C～17C	唐津
				N3-X24. P4	埋土	3	陶器	丸皿	口～体				16C	瀬戸・美濃灰釉
				N4-U1. P2～P3	埋土	4	磁器	皿	体					国産青磁
				N4-U2. P5	埋土	5	磁器	?	底(脚?)				15C～16C	中国産青磁
				N4-U2. P8	埋土	6	磁器	皿	体				18C～19C	国産染付
				N4-Y9. P2	埋土	7	陶器	碗	口～体				16C～17C	唐津
				O4-B1. P1	埋土	8	磁器	皿	体					国産青磁
				O3-A9. P6	埋土	9	陶器	鉢	体				16C～17C	唐津
	46			N3-W23. P5	埋土	10	陶器	皿	口～底	121	45	31	16C～17C	唐津、胎土目
	57			N3-W23. P5	B	11	陶器	皿	体					唐津鉄絵、胎土目
				N3-U19. P1	埋土	13	陶器	皿	口～体					唐津
	33			O2-A20. P1	埋土	14	陶器	皿	体～底		64			瀬戸・美濃
				O2-A20. P1	埋土	15	陶器	茶碗	体					瀬戸・美濃天目茶碗
	69			N3-R16. P2	埋土	16	陶器	四耳壺	肩部				12C	中国産褐釉
		c	RG2100	RG001, O3-B3	C	1	陶器	甕	体					常滑
				RG2005,	埋土	2	陶器	碗	口～体					唐津
				RG2005,	埋土	3	陶器	甕	体					常滑 2点
				RG2009, O3-B23	埋土	4	陶器	擂鉢	体～底					備前
			RG1014	RG, O3-L9	埋土	5	陶器	甕	頸部					常滑
				N3-A19	検出面	1	磁器	鉢	底					
				N3-Q22	検出面	2	磁器	茶碗	体					
				N3-R6	検出面	3	陶器	四耳壺	頸～体				12C～13C	中国褐釉 (P2)
				N3-R17	検出面	4	陶器	皿	口～体				16C	瀬戸・美濃
				N3-R17	検出面	5	磁器	皿	体～底					国産染付
					検出面	6	磁器	皿	体～底					初期伊万里
				N3-W19	検出面	7	磁器	皿	口～体					花古
				N3-X24	検出面	8	磁器	皿	体～底					青磁
	56			N3-Y19	検出面	9	陶器	碗	口～体	153				唐津、鉄絵

	挿図No.	写図記号	遺構番号	(旧遺構番号)出土地点	層位	台帳No.	種別	器種	部位	計測値(mm) 口径	底径	器高	年代	産地・備考
				N4-L3	検出面	10	陶器	碗	口～体					唐津
				O2-J5	検出面	11	陶器	甕	体					常滑
				O3-A23	検出面	12	陶器	碗	口～体					唐津
				O3-A25	検出面	13	陶器	甕	体					常滑
				O3-A25	検出面	14	陶器	甕	体					常滑
				O3-A25	検出面	15	磁器	碗	口～体					染付
				O3-E24	検出面	16	陶器	碗	底					唐津
	55			O3-H22	検出面	17	陶器	碗	口～底	139	44	41	16C～17C	唐津
				O3-C20	検出面	18	陶器	皿	口～体					瀬戸・美濃灰釉
	53			(Ⅳ-23)	検出面	19	陶器	碗	口～底	158	59	45	16C～17C	唐津鉄絵、胎土目
				O2－I5	Ⅰb	21	磁器	皿	底					
				(Ⅱ—A)	—	22	陶器	碗					16C～17C	唐津
				N3-V15	撹乱	26	陶器	皿	体					瀬戸・美濃灰釉
				O3-F25	撹乱	27	磁器	皿	体～底					肥前染付
				O3-F25	撹乱	28	磁器	皿	体～底					肥前青磁
				O3-G22	撹乱	29	磁器	鉢	口～底					北山
				O3-G22	撹乱	30	磁器	皿	口～底					肥前
				O3-G22	撹乱	31	磁器	皿	底					山薩
				B区	—	34	陶器	鉢	体～底					唐津
	35			—	—	35	陶器	皿	口～底	118	61	23		瀬戸・美濃
	48			—	—	36	陶器	皿	口～底	112	37	27		唐津、胎土目
				—	—	37	陶器	皿	口～底					唐津
	29			—	—	38	陶器	鉢？	体～底		163			信楽
				—	—	39	磁器	皿	体～底					青磁　脚付
	44			—	—	40	陶器	皿	口～底	121	63	33	17C	瀬戸・美濃、輪禿皿
	57			—	—	41	陶器	皿	口～底					唐津
	54			池跡　O3-G23	埋土	42	陶器	碗	底				17C	唐津、胎土目
25				RD2524, O3-H14	—	1	陶器	皿	体				16C	瀬戸・美濃灰釉
				RD2554, O3-N4	B	4			体					
				RX01, O3-L10	埋土	1	陶器	碗	体～底		55.5		18C～19C	淡緑色灰釉
				SD2100	埋土	1	陶器	擂鉢	底部				17C～18C	備前, 内面著しい摩滅
	31			O3－C16, Pit3	埋土	2	陶器	皿	口～底	128	39	42	18C後半	京焼
	36			O3-T24, Pit2	埋土	4	陶器	皿	底				16C中葉	瀬戸・美濃灰釉
				O3－P12, Pit5	A	5	陶器	天目茶碗	口				15C	瀬戸・美濃　被熱？
				O3－H12	検出面	4	陶器	壺？	体				12C～13C	常滑
				O3－H12	検出面	5	陶器	甕	体				12C～13C	常滑・外面タタキ
				O3－I10	検出面	6	磁器	碗	体				12C～13C	中国白磁
				O3－B19	—	13	磁器	皿	体				18C	肥前染付皿　格子目文
					—	14	陶器	碗	体				近世	飴釉

Ⅲ　調査の総括

1　遺跡の変遷

古　　代

本遺跡内に9世紀後半ごろの竪穴住居跡が1棟確認されているほか、西側に隣接する柿ノ木平遺跡では10世紀後半～11世紀前半の土坑が1基確認されている。この土坑からは小皿、高台付坏が出土している。9世紀後半から10世紀前半ごろの遺物は調査区内全域に散布しており、当時の集落の一部であったことがわかる。

中世初期

12世紀のかわらけが遺跡北半部に多く散布している。手捏かわらけが目立つが、ロクロかわらけも少量ながら破片で存在する。ほかに常滑の甕や三筋文壺、須恵器系壺、中国青磁碗、褐釉四耳壺の破片が出土している。しかし当該期の確かな遺構は確認されていない。東側に隣接する堰根遺跡ではこの時期の掘立柱建物群や竪穴建物などが確認されており、大溝などからの出土遺物などはこのあたりからの流入も考えられる。しかし本遺跡北半部のかわらけの集中のありかたからは、この部分になんらかの宗教的または儀礼的空間が存在した可能性も否定できない。

中世後期（Ⅰ期～Ⅲ期）

Ⅰ　**期**　Ⅰ期は北側段丘崖に面して、弧状の溝RG1009が開削される。郭内の大きさは南北26m、東西33mほどである。北西側段丘崖近くにはRX1001通路があり、郭内へ右折して進入するようになっている。この時期、郭内の建物はRB1016、及びRE1008の２棟が考えられる。RE1008竪穴建物跡（以下竪穴とする）は、西壁を縮小しており、新期の竪穴はⅡ期の段階までは残る可能性もある。

Ⅱ　**期**　Ⅱ期はRG1009が埋められ、RD1002とRG1003が開削される。RG1002の開削により、郭内は南北20m、東西31ｍに狭くなる。郭内への出入口は東側のRX1002に付け替えられる。RG1002の内側にはRC1001、RC1002、RC1003の各掘立柱列跡（以下柱列とする）、RB1009掘立柱建物跡（以下建物とする）が添っており、大溝内側の遮蔽物とそれに付属する簡易な建物と考えられる。郭内中央部にはRB1008建物（新期）、RE1006竪穴建物が存在する。RG1002埋土下部やRE1006の新期埋土には炭化物や焼土粒が混入し、この時期に郭内建物が焼失している可能性が高い。南側のRE1002埋土中位から15世紀後半から16世紀前半代の中国染付Ⅲが出土している。

Ⅲ　**期**　Ⅲ期はRG1002大溝がほぼ埋没し、外側のRG1003がまだ機能している。郭内は東西33m、南北26mの大きさとなり、出入口は東側のRX1002が継続して機能すると思われる。RG1001が南西部に開削され、RG1003の西側に合流する。郭内建物は北西部にRB1014、1015建物、中央部にRB1017建物、南西部にはRG1002を掘り込んでRE1007竪穴建物が存在する。郭外の南半部ではRB2806、2812、2813建物、RE2006竪穴から成る屋敷が営まれる。この屋敷の初源はⅡ期またはⅠ期までさかのぼる可能性もあるが確定できない。この時期はⅣ期以後のような、屋敷周囲を区画する大溝や区画溝は存在せず、柵や柱列が南側、東側などに認められる。

Ⅰ期からⅢ期までの北半部は小規模な掘立柱建物と竪穴建物を、大溝や柱列によって囲郭する構造であり、小規模ながら段丘崖を活用した要害を形成することから、小規模な城館遺構と考えられる。南半部の屋敷は大溝がなく、柱列が散発的にみられるが囲郭プランは明瞭でない。北半部小規模城館がまず存在し、この南側にはⅢ期までに屋敷が成立するらしい。

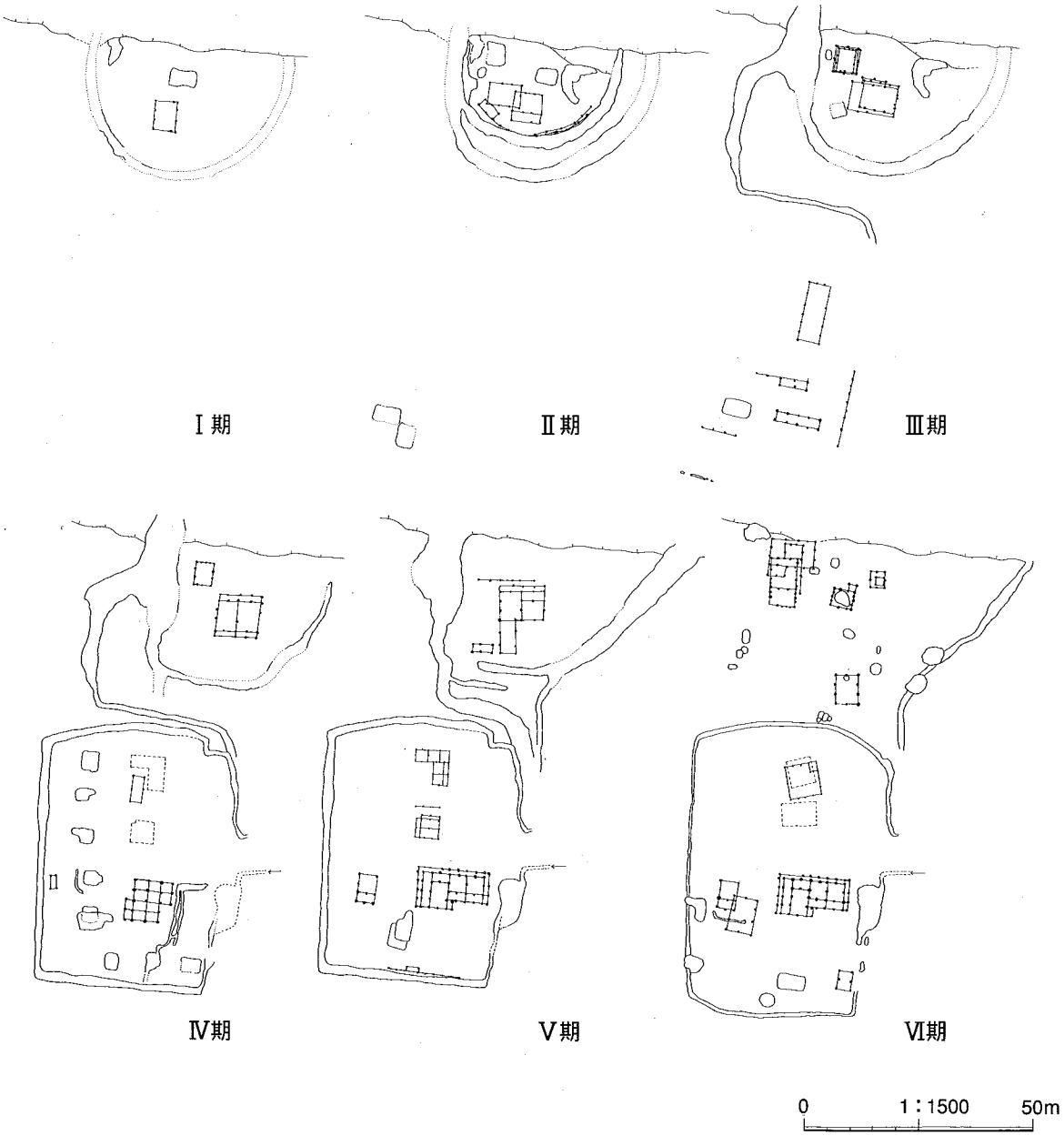
Ⅰ期からⅢ期の年代は、次のⅣ期との関係から、概ね16世紀代と推定される。

近　　世（Ⅳ期～Ⅵ期）

Ⅳ　**期**　Ⅳ期はRG1003大溝が半ばまで埋没し、RG1007溝が開削される。これにより北側の郭内は東西24m～34m、南北27mの不整方形のプランになる。中央部には東西２間取りで南北２面に下屋をもつRB1003建物、北西部にはRB2013建物が存在する。RB2013は、地中から壁が立ち上がる構造構造の建物で、倉もしくは納屋のような建物と考えられる。南半部では東西37mから41m、南北57mの長方形の範囲をRG2100大溝で区画する。西面、南面の溝は規模が大きく、北面はやや小さい。東面はさらに小規模で、中央部は開放されている。区画された内部には中央南よりには総柱で東西西２面に廂もしくは下屋を有するRB2814建物を中心に、北部には１間×２間または２間×２間のRB1804、1805の建物が存在する。これら建物の西側にはRE2001、2002、2004、2005、2006の竪穴、南側には2010、2012の竪穴が存在する。大溝はやや不完全な結界であるが、環壕屋敷を形成しているとみてよかろう。Ⅳ期の年代は遺跡から多く出土する唐津のⅢや志野Ⅲ、初期伊万里のⅢ類などの時期と考えられ、概ね17世紀前葉から中葉あたりと推定される。

Ⅴ　**期**　Ⅴ期は、北半部のRG1001と1007の溝が埋没し、RG1004、1005の溝、RG1004の大溝が機能している。

RG1004の西端はRG1014の5m東側で途切れ、出入口となっている。これらの溝によって、北側の郭内は東西の長さは、北辺が43m、南辺が23m、南北の広さは23mとなる。RG1014は下部が相当埋没し、所々に集石による土手を築いて水田状の区画を造っている。郭内の中央部には東西2間取りで北側下屋のある母屋に、1間×3間の角屋のある、曲屋風の建物RB1004が存在する。北側に柱列が伴う可能性が高い。南西側には小規模な1間×2間のRB1005建物が付属する。南半部ではⅣ期のRG2100大溝の区画が踏襲されている。中央南よりには、3間×4間の身舎2棟をL字型に連結し、三面に下屋を配した大形のRB2810建物が建てられる。南側の大溝に面して、両側に柱列を伴うRB2818の門、西側には2間×2間の小規模なRB2816建物、北側には2面に下屋を持つ2間四方のRB2808建物、柱列を隔て、北端部には曲屋のRB2801建物が存在する。Ⅴ期の年代は17世紀後葉から18世紀前半あたりと推定される。

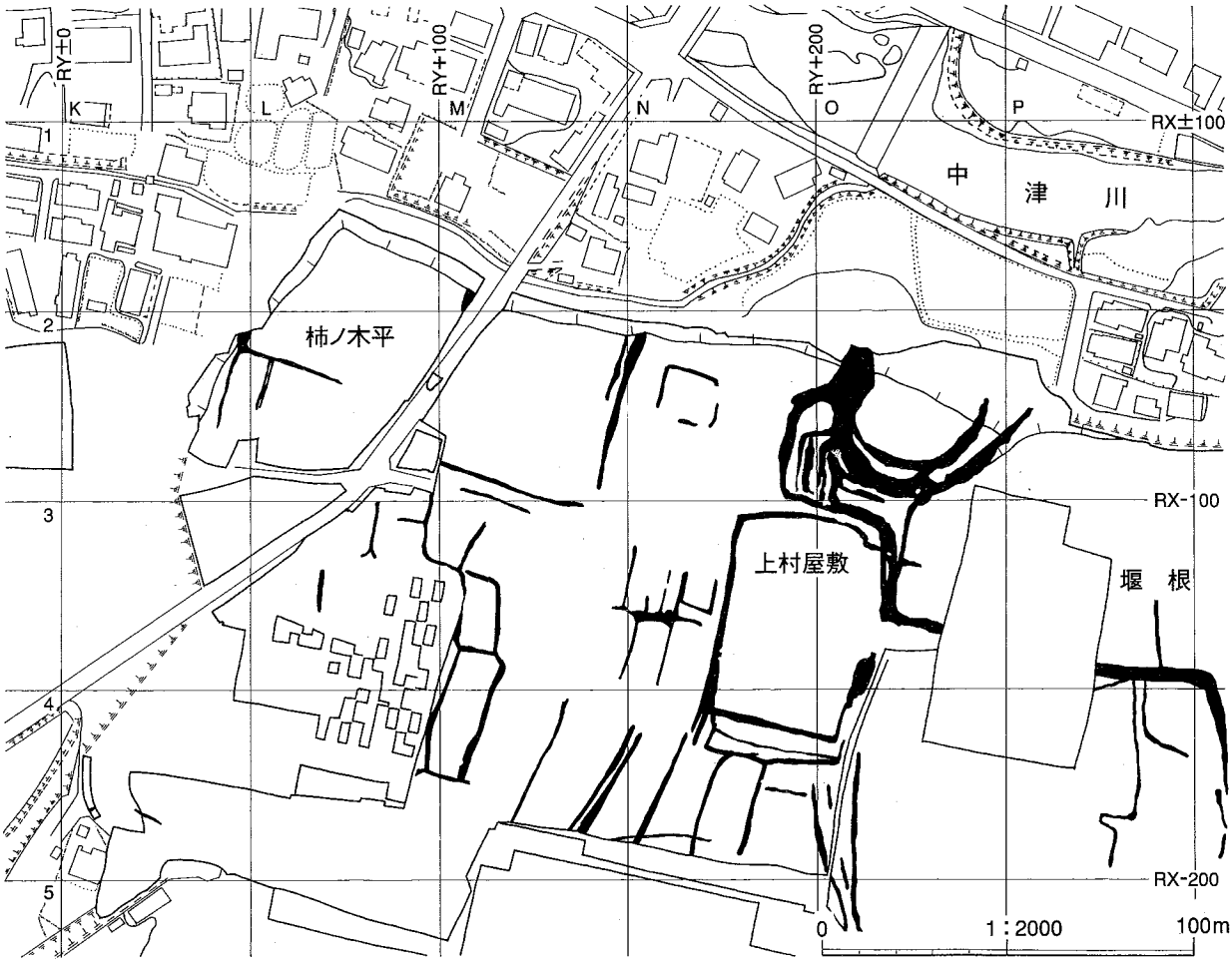


第22図　遺構変遷図

Ⅵ　期　Ⅵ期は北半部ではすべての溝が埋没し、北西側にRB1001、1002の重複する建物、その東側にはRB1011、1012の小規模な建物と、内部に不整形土坑をもつ２間×３間のRB1007建物、南側にやや規模の大きい２間×３間のRB1006建物が存在する。南半部の環壕屋敷はRG2002の狭い溝が、かつての環壕RG2100大溝と半ば重複しながら屋敷を囲んでいる。南北63m、東西43mの規模で南側と東側に少し広くなっている。中央南よりにはⅤ期からのRB2810が残る可能性があり、西方にはRB2818の建物、南東隅にはRB2817の建物、北側には方位をやや西に傾ける２棟の建物RB2802、2806が存在する。南側中央に井戸が設けられ、西側の溝と東側溝には池が設けられる。この時期はRG1014大溝埋土上部や、RG2002溝の出土陶磁器などから、18世紀後半から19世紀代の時期が考えられる。

2　遺跡の性格

この地には16世紀のある段階に小規模城館が成立してから、近世、幕末の19世紀に至るまで、連綿として城館や屋敷が継続している。おおむね16世紀と考えられるⅠ期からⅢ期までの北半部は、小規模な掘立柱建物と竪穴建物を、大溝や柱列によって囲郭する構造であり、小さいながらも段丘崖を活用した要害を形成することから、小規模な城館遺構と考えられる。南半部の屋敷は大溝がなく、柱列



第23図　上村屋敷・柿木平遺跡（中近世溝）

が散発的にみられるが囲郭プランは明瞭でない。Ⅰ期からⅢ期には北半部に小規模城館がまず存在し、この南側にはⅢ期までに屋敷が成立するらしい。また、Ⅳ期～Ⅵ期は北半部の小規模城館がなくなり、南半部の屋敷が環壕屋敷となる。北半部も当初はⅢ期のプランの影響の残る不整形区画のなかで屋敷が形成されるが、しだいに溝が埋没し、区画溝のない屋敷となる。17世紀から19世紀に至る南半部の環壕屋敷は、この地の豪農または名主層の屋敷と考えられる。

では、16世紀のある時期、この地に小規模城館が成立した理由は何であろうか。

中世後期の浅岸

福士氏

室町時代から戦国時代にかけて、この地は不来方（現在の盛岡市街地中心部）の領主福士氏の影響下にあった。福士氏は不来方殿と呼ばれ、拠点の不来方城は淡路館と慶善館からなる城館で、それぞれ近世盛岡城の内曲輪と外曲輪の一部に該当する。上村屋敷遺跡の主な遺構は16世紀以後の年代であるが、16世紀中ごろの岩手郡は、南からは志和郡の領主斯波氏、北からは糠部の三戸南部氏が進出し、双方のせめぎあいの地となっていたらしい。天文年間に三戸の南部晴政が糠部から岩手郡に進出するが、このとき福士伊勢守広高は玉山、日戸、下田、栗谷川、上田、川目の諸氏を従えて南部晴政に臣従している（『祐清私記』）。また元亀、天正期における南部氏の志和郡進出では、福士氏は中野氏とともに岩手郡南端の要地不来方城や中野館の守備にあたっている（『祐清私記』他）。一方斯波氏は岩手郡雫石（雫石町）と猪去（盛岡市上太田）に一門を配していたが、天正14年から同16年の間に、南部信直によって滅ぼされている。このころまでに中津川支流の米内川沿いの地域に、岩手郡一方井氏一族の米内氏が入っているが、本遺跡北西の対岸にある佐々木館は佐々木氏の城館とされ、佐々木氏は米内氏や浅岸氏入部以前の下米内地域の領主であろう。この佐々木館麓の大豆門権現社棟札には、「天正十一年不来方淡路再興」と記されていた（国立歴史民俗博物館 1997）。また、本遺跡の中津川対岸にある薬師神社も、南部晴政の時に不来方淡路再興とあるほか、米内氏が15石の社領を寄進したと伝えられている（『盛岡市史中世期』）。不来方氏は福士氏の一門であり、このころには下米内の領主が佐々木氏から不来方氏へと交代していたことを示すもので、村落領主層にも変転が見られる時代であった。16世紀後半の天正年間には、浅岸に浅岸源五郎、中津川上流の元信に元信弥六の名が見えているが、この２名は福士氏の一族とされている（『岩手県史第２巻』所収系図）。ともに天正年間ごろの村落領主である。元信氏は本遺跡から東方6.5kmの山中にある、元信地区を俯瞰する山上に小規模城砦の元信館を築いている。浅岸氏の拠点についてはこれまで明確ではなかったが、本遺跡の小規模城館と付属する屋敷がこれに該当する可能性は高い。おそらくは南部氏の岩手郡進出により佐々木氏が下米内の支配権を失い、南部氏に臣従した福士氏の勢力伸張に伴って福士一門の浅岸氏や元信氏が浅岸に定着したと見るべきであろう。米内氏の村入りも天正年間と考えられ、これも同じころのことであろうか。このあたりの事情が上村屋敷小規模城館の成立と大きく関係することであろう。この後、16世紀の末あたりに小規模城館は廃されて屋敷地となり、その南側には環壕屋敷が形成される。この時代の変化にあたり、上村屋敷の居住者が交代したか否かは全く不明であるが、このころの唐津皿や初期伊万里皿の卓越は、上村屋敷の全盛期といってよいほどの出土量である。年代的には、慶長２年（1597）、または同３年に始まる盛岡城築城や城下町建設の時期とも重なるが、北半部のⅢ期からⅣ期への変遷は、かつての小規模城館の囲郭施設を半ば継承する形で存続しており、出土陶磁器や遺構変遷には継続性がうかがえる。

浅岸氏

元信氏

近世への移行

不来方の福士氏は南部氏の盛岡城築城に伴う不来方城接収のあたりに、一旦は秋田に亡命し、その後盛岡南部家に帰参を許されている（『奥南旧指録』）が、知行は150石と大幅に減封されたうえ、知行地は岩手郡鵜飼村（滝沢村）、二戸郡長流部村（二戸市）、と変転し、寛文５年の八戸藩分封にあたり、八戸御分士として八戸に移住し、現在に至っている（『福士家文書』）。つまり盛岡藩政草創期において、中世以来の不来方の領主福士氏は、盛岡南部氏によって支配権を剥奪され、一族離散、衰亡の憂き目にあったことになる。しかし上村屋敷遺跡の16世紀末から17世紀前葉の隆盛は、明らかに居住者の繁栄を物語るものであり、福士一門であっても浅岸氏や元信氏などは、何らかの事情で旧領にとどまることが許されたものであろうか。あるいは不来方の福士宗家と命運をともにし、新たな領主に速やかに旧領を引き継ぐことになったのかもしれない。

この時期の居住者の繁栄とは、おそらくは盛岡城築城や城下の建設との関連であり、地理的に考えれば建築資材としての、大量の木材供給ではなかったかと推測される。本遺跡の東側は北上山地と接し、南西３kmの中津川下流には盛岡城が存在する。中津川と米内川合流点から約700m下流の南岸に「春木場」の字名があり、古い時代の木材集積場の存在を暗示している。浅岸氏や元信氏のその後の消息については不明であり、現在の本遺跡周辺の居住者との関係も明確ではない。いずれにしても考古学的調査成果のみでは、この間の詳細をたどることが難しく、新たな視点による文献史料の再検討と、周辺遺跡の調査の蓄積を待って究明しなければならない。

中世浅岸村の検証は、ようやく緒についたばかりである。

引用・参考文献

田中　喜多美　1951　『盛岡市史第二分冊中世期』盛岡市

田中　喜多美　1961　『岩手県史第２巻』　岩手県庁

南部叢書刊行会　1928　「奥南舊指録」『南部叢書第二冊』

南部叢書刊行会　1928　「祐清私記」『南部叢書第三冊』

盛岡市教育委員会　1982　『柿ノ木平遺跡』1975・1976年度

盛岡市教育委員会　1983　『柿ノ木平遺跡』昭和57年度

盛岡市教育委員会　1985　『柿ノ木平遺跡』昭和59年度

盛岡市教育委員会　1999　『前野遺跡発掘調査報告書』

盛岡市教育委員会　2003　『向田遺跡発掘調査報告書』

国立歴史民俗博物館　1997　『社寺の国宝・重文建造物等棟札銘文集成―東北編―』

写　真　図　版

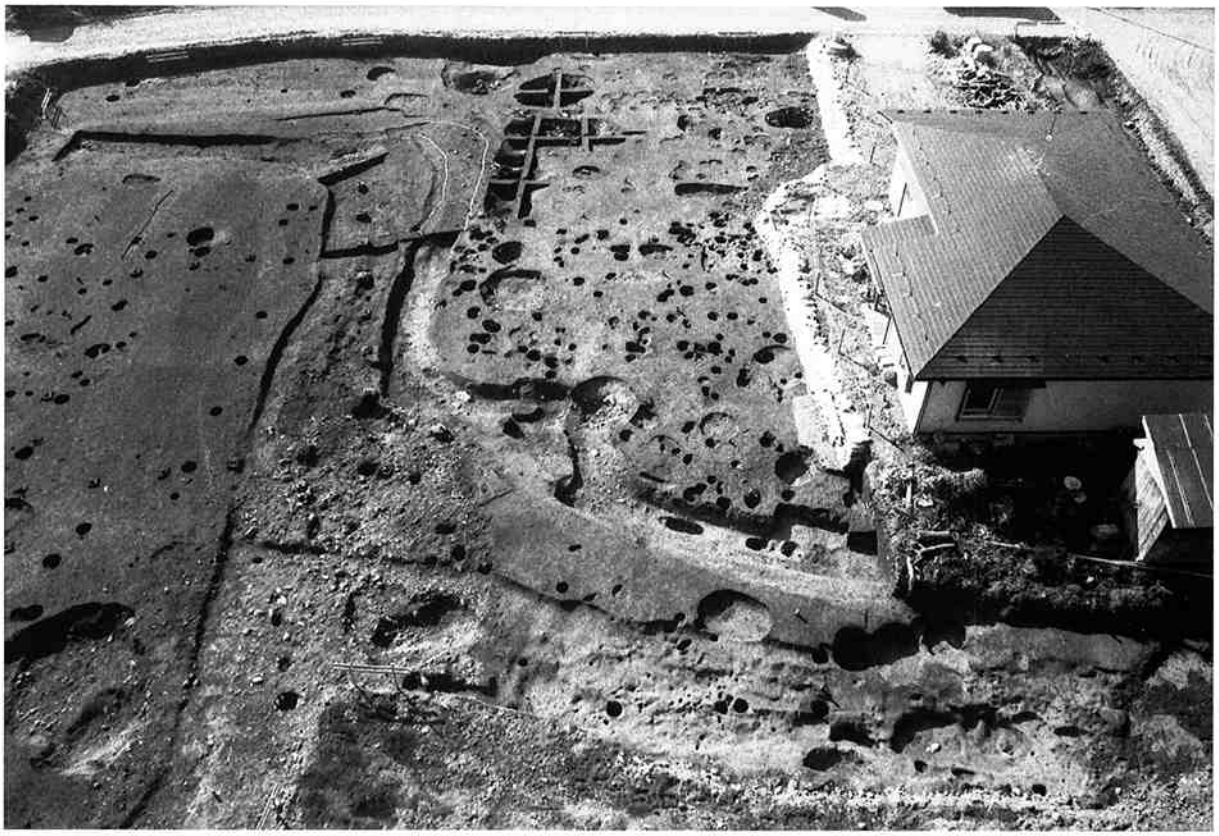
上村屋敷遺跡出土陶磁器（罹災前）

撮影　いろは写房

第２図版

北半部郭内（Ｗ→Ｅ）

北半部南西側大溝（ＮＷ→ＳＥ）



南半部環壕屋敷北東部（N→S）

南半部環壕屋敷中央部（S→E）

第４図版

RG1002・1003 大溝

RB1006 掘立柱建物跡

RG1004 大溝の調査

RG1004 埋土中位の集石

北側段丘崖と河道の調査

RG1002 大溝跡

RG1003・1014・1013 大溝跡

RG1003・1014・1013・1015 大溝跡

環壕中央部の掘立柱建物跡

環壕中央部の掘立柱建物跡

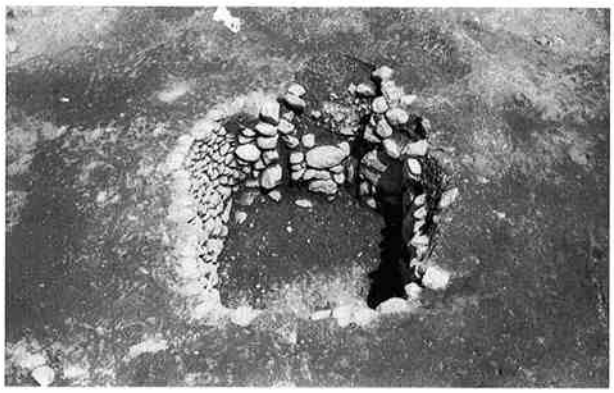
環壕中央部の遺構群

RE2008 竪穴建物跡

RE2003 竪穴建物跡

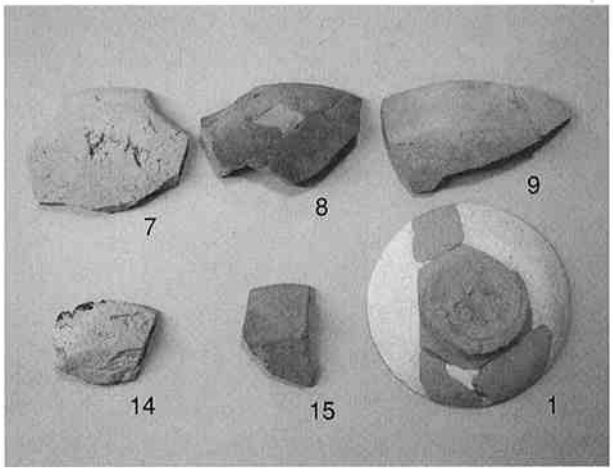
RD2019 井戸

RD2029

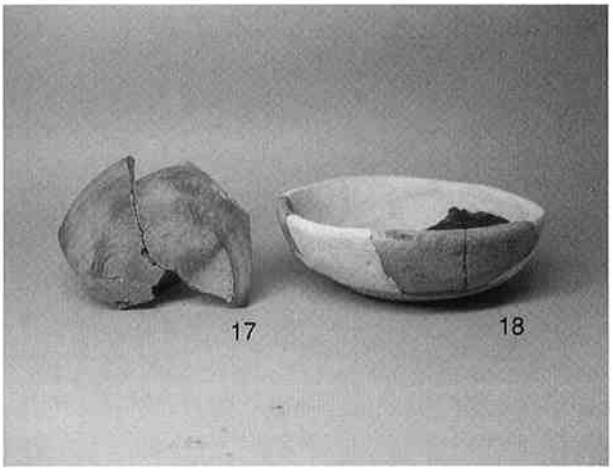


RD2022

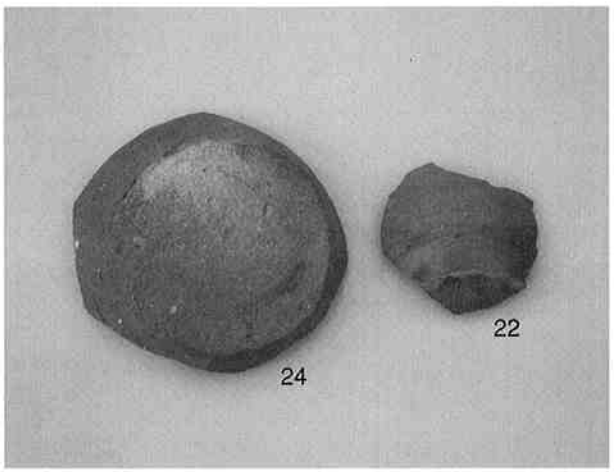
第６図版



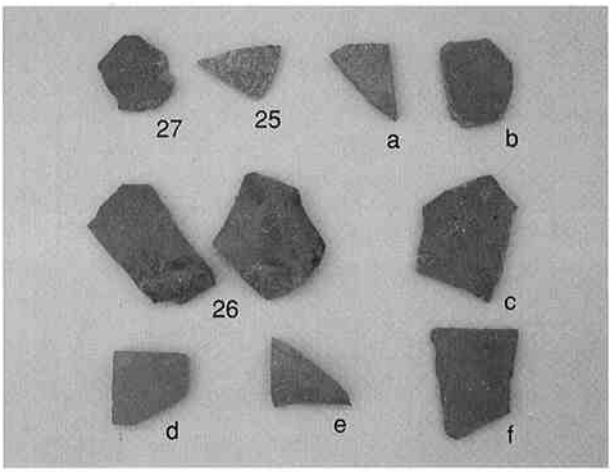
かわらけ



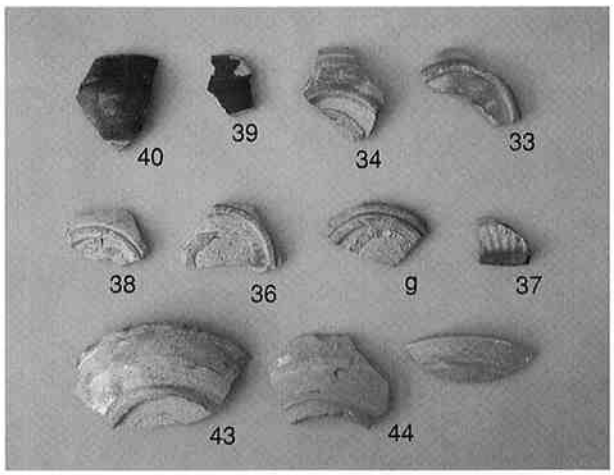
かわらけ



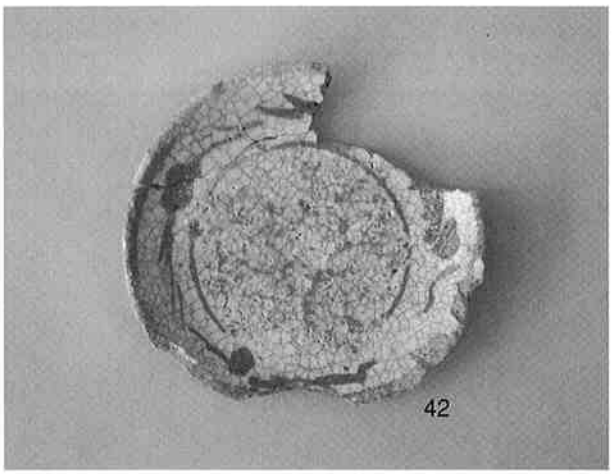
須恵器系壷



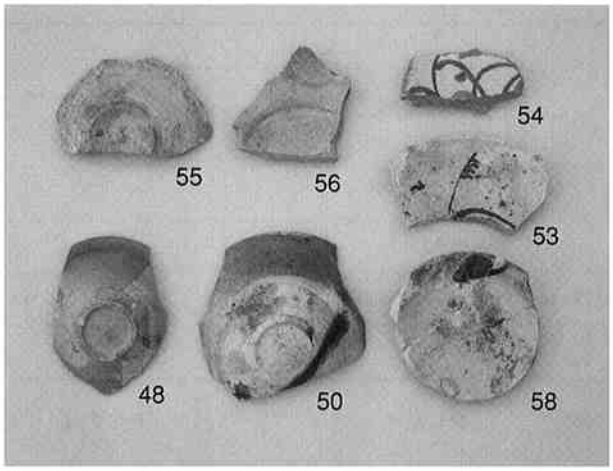
常滑甕



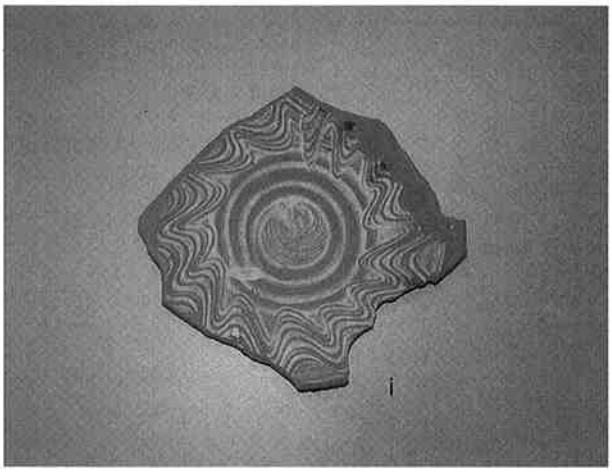
瀬戸・美濃陶器



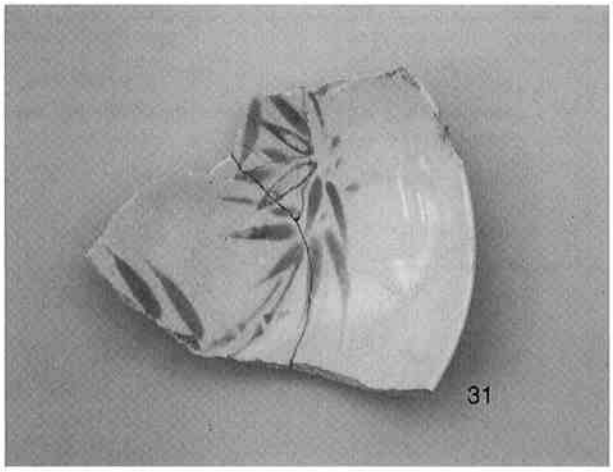
志野鉄絵皿



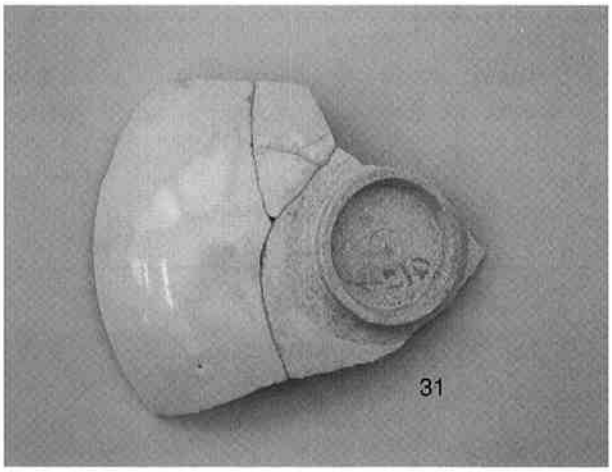
唐津皿



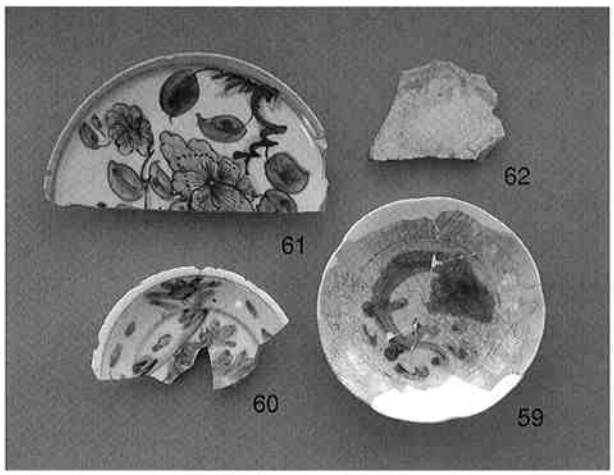
唐津大鉢



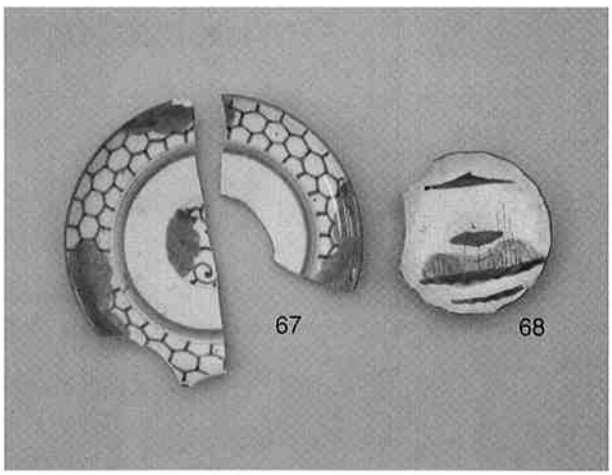
京平碗（内面）



京平碗（外面）



肥前（初期伊万里）



国産染付

報告書抄録

ふりがな	わむらやしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	「上村屋敷遺跡発掘調査報告書」
副 書 名	浅岸地区土地区画整理事業関連発掘調査報告書Ⅲ
編著者名	室野秀文　他
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館
所 在 地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地１　TEL019-635-6605　(内線3077)
発行年月日	2007/3/31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わむらやしきいせき 上村屋敷遺跡	いわてけんもりおかしあさぎし 岩手県盛岡市浅岸			39° 42′ 48″	141° 10′ 58″	1998.4.10 ～ 2002.9.17	5,749	土地区画整理

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上村屋敷遺跡 第3次～7次	城館跡 屋敷跡	中世 ～ 近世	掘立柱建物跡33 竪穴建物跡17 竪穴３ 土坑206 井戸３ 焼土１	かわらけ 常滑、渥美、須恵器系、 信楽、京、唐津、初期伊 万里、国産染付	中世後期小規模城館跡 近世環壕屋敷跡、屋敷跡

上村屋敷遺跡発掘調査報告書

－浅岸地区土地区画整理事業関連発掘調査報告書Ⅲ－

2007.3.31

編　集　盛岡市遺跡の学び館
岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

発　行　盛岡市・盛岡市教育委員会
岩手県盛岡市内丸12番2号

印　刷　株式会社　阿部印刷
岩手県盛岡市松尾町2－2